藤原齊信　爲光第二子、典故ニ練習ス、辭藻宏麗、俊賢、公任、行成ト四納言ト稱ス、

惟宗允亮　公方孫、夙ニ才名アリ、明法博士トナル、宗河記ヲ著ハス、

惟宗公方　延長間、明法博士大判事、博覽多通、當時法律多クハ其手ニ成ル、

賀茂忠行　學和漢ヲ兼ネ、陰陽推步ヲ善クス、陰陽師トナル、

藤原保昌　元方孫、膽智勇決、膂力人ニ過ク、和歌ヲ善クス、長元九年卒、年七十九、

賀茂保憲　父忠行ノ方術蘊奥ヲ傳フ、曆博士陰陽頭天文博士トナル、貞元二年卒ス、

大江以言　玉淵孫、才學アリ、詩文ヲ善クス、

僧能因　初名橘永愷、和歌ヲ嗜ム、攝津古曾部ニ居ル、世ニ古曾部入道ト稱ス、

安倍晴明　陰陽推算ニ通シ、奇中神ノ如シ、天文博士トナル、

紀齊名　能文ヲ以テ聞ユ、卒年三十四、扶桑集ヲ撰ス、

平貞盛　葛原親王玄孫、將門ヲ誅シ、功ヲ以テ鎮守府將軍ニ任ス、平氏ノ宗タリ、平將軍ト稱ス、

大中臣能宣　坂上望城、源順、紀時文、清原元輔ト後撰和歌集ヲ撰ス、世ニ梨壺ノ五人ト稱ス、正曆二年卒、年七十、

源順　詩文及ヒ和歌ニ達ス、後撰和歌集ヲ撰スルニ、與カル、梨壺五人ノ一ナリ、

和名類聚鈔ヲ著ハス、永觀七年卒、年七十三、

菅原文時　文才博洽、名聲當時ニ震フ、從三位ニ叙ス、薨年八十四、菅三品ト稱ス、子輔昭亦著ハル、

小野好古　性勇武、純友ノ亂ヲ平ク、安和元年薨、年八十五、

藤原師通　師實子、豁達學ヲ好ム、文士ヲ進メ勢利ヲ黜ク、關白ト爲ル、康和元年薨、年三十八、後二條殿ト稱ス、

藤原忠文　四朝ニ歷事ス、天慶ノ亂ニ征東大將軍ニ拜ス、天曆元年卒、年七十五、

橘直幹　長盛子、天曆中、文章博士トナル、家貧、上疏自ヲ薦ム、詔シテ式部大輔ヲ授ク、

源賴光　滿仲長子、驍勇世ニ冠タリ、治安元年卒、

藤原伊周　道隆二子、才貌人ニ過ク、花山法皇ヲ射、太宰ニ謫ス、後赦サレ歸ル、

源顯基　夙ニ退志アリ、常ニ言フ願クハ罪ナクシテ配所ノ月ヲ見ント、永承二年卒、

源賴信　滿仲子、剛果明決、兵法ニ練達ス、兄賴光ト名ヲ齊シクス、平忠常ノ亂ヲ平ク、永承三年卒、

源賴義　賴信子、武略アリ、安倍貞任ヲ夷ケ、武ヲ東國ニ著ハス、源氏ノ興ル此ニ

基ス、

源義家　賴義子、勇武明決、最モ騎射ニ妙、父ニ從ヒ安倍貞任清原武衡等ヲ夷ク、又和歌ヲ善クス、天仁元年卒、年六十八、

大江定基　重光子、文章ヲ善クス、僧トナリ寂照ト名ク、後宋ニ赴ク、圓通大師ノ號ヲ賜フ、

慶滋保胤　菅原文時ニ從ヒ文章ヲ善クス、後髮ヲ削リ名ヲ寂心ト號ス、池亭記ヲ著ハス、

藤原長能　和歌ニ工ニ、道信、實方、道濟ト並稱ス、圓融、華山、一條、三朝ニ歷仕ス、

紫式部　藤原爲時女、和歌ヲ善クス、和漢舊記ニ涉リ、朝廷典故ニ通ス、上東門院ニ仕フ、源氏物語ヲ著ハス、

清少納言　清原元輔女、才學アリ、紫式部ト名ヲ齊シクス、上東門院ニ仕フ、枕草子ヲ著ハス、

大貳三位　紫式部女、和歌ヲ善クス、狹衣物語ヲ著ハス、

和泉式部　大江雅致女、和歌ヲ善クス、橘道貞ニ嫁ス、後上東門院ニ仕フ、其女小式部內侍才名母ニ亞ク、

赤染衞門　大江匡衡妻、和歌ヲ善クス、和泉式部ト名ヲ齊シクス、女江侍從亦和歌ヲ善クス、

伊勢大輔　大中臣輔親女、和歌ヲ善クス、紫式部等ト名ヲ齊シクス、亦上東門院ニ仕フ、

藤原道長　性豪爽氣ヲ負フ、一家三后、位人臣ヲ極ム、御堂關白ト曰フ、萬壽四年十二月薨、年六十二、

大江匡衡　重光子、學問博洽、長和元年卒、年六十一、江吏部集アリ、

大江朝綱　音人孫、該博宏贍、詞藻典麗、天德中卒、年七十二、世ニ後江相公ト曰フ、

藤原菅根　博ク經史ニ涉リ、兼テ百家ニ通ス、天慶七年薨、年六十六、

藤原賴通　道長子、宇治關白ト稱ス、又法性寺殿ト曰フ、驕侈ヲ過ク、承保元年薨、年八十三、

藤原教通　道長子、太政大臣、承保二年薨、年八十、二條殿ト稱ス、

丹波雅忠　父祖ノ業ヲ繼キ、醫博士トナル、承曆中、高麗王妃疾ス、雅忠ヲ借ラントヲ請フ、朝廷許サス、

藤原明衡　宇合ノ後、東宮學士、學ヲ好ミ文ヲ善クス、本朝文粹ヲ撰ス、

源隆國　俊賢第二子、今昔物語ヲ著ハス、薨年七十四、宇治大納言ト稱ス、

源師房　具平親王長子、文及ヒ和歌ニ工、太政大臣ニ拜ス、薨年七十、

源俊房　師房子、政事ニ練達シ、書ヲ善クス、從一位左大臣、保安二年薨、年八十七、堀河左府ト稱ス、水左記ヲ著ハス、

源顯仲　顯房第二子、書及ヒ和歌ニ工ナリ、良玉和歌集ヲ撰ス、

藤原師實　賴通子、關白トナル、康和三年薨、年六十、京極關白ト稱ス、

藤原通俊　和歌ニ長ス、勅ヲ奉シテ後拾遺和歌集及ヒ續新撰和歌集ヲ撰ス、康和元年薨、年五十三、

大江匡房　匡衡曾孫、穎悟絶倫、幼ニシテ神童ト稱ス、天永二年薨、年七十一、世ニ江帥ト稱ス、

源俊明　隆國子、後三條帝ニ仕ヘ、寵遇ヲ受ク、永久二年薨、年七十一、

藤原顯季　和歌ヲ善クシ、自ヲ一家ヲ成ス、常ニ人麻呂ヲ慕フ、保安中薨、年六十九、

僧寛朝　敦實親王子、廣澤密派ノ祖ナリ、

三善爲康　學ヲ好ミ善ク文ヲ屬ス、永久中、朝野群載ヲ撰ス、

僧覺猷　源隆國子、醍醐又鳥羽ニ住ス、故ニ鳥羽僧正ト曰フ、畵風一家ヲ成ス、戲畵ニ妙ナリ、

源雅實　顯房長子、太政大臣、朴直敢言、白河帝之ヲ憚ル、大治二年薨、年六十九、久我ト稱ス、

藤原爲隆　器宇倜儻、才幹人ニ過ク、大治五年薨、年六十一、坊城ト稱ス、

源義光　賴義第三子、新羅三郎ト稱ス、刑部少輔、大治二年卒、

藤原顯隆　三朝ニ仕フ、中記、都記ヲ著ハス、大治四年薨、年五十八、

源師賴　俊房子、博聞强記、才藻アリ、保延五年薨、年七十、小野宮ト稱ス、

佛師定朝　七條佛師ノ祖、古今ノ名手、事ハ彫刻部ニアリ、康慶、運慶、湛慶、等皆其裔ニテ大ニ著ハル、

藤原敦光　保延元年、災異荐ニ臻ル、敦光上疏之ヲ論ス、天養元年卒、

平忠盛　白河法皇ニ仕ヘテ寵アリ、平氏ノ昌大此ヨリ始マル、仁平三年卒、年五十八、

源爲義　義親子、祖父義家ノ後ヲ嗣ク、保元ノ亂、崇德上皇ニ從ヒ、戰破レ斬ラル、時ニ年六十一、

藤原光賴　顯賴長子、平治ノ亂、信賴ヲ面折シ、弟惟方ヲシテ帝及ヒ上皇ヲ護セシム、承安三年薨、年五十、桂大納言ト稱ス、

藤原惟方　光賴弟、初メ信賴ノ叛ニ與ス、後悔悟シ、夜ニ乘シ乘輿ヲ奉シテ大內ヲ出ツ、

藤原忠實　師通長子、關白トナル、忠通ヲ疎シテ賴長ヲ愛シ、保元ノ亂ヲ釀ス、富家殿ト稱ス、應保二年薨、年八十五、

藤原忠通　忠實長子、攝政關白太政大臣、法性寺關白ト稱ス、長寛二年薨、年六十八、

藤原賴長　忠實第二子、學問通博、保元ノ亂、流矢ニ中リ死ス、惡左府ト稱ス、其日記ヲ台記ト曰フ、子師長、太政大臣ニ至リ、妙音院大臣ト曰フ、

佐藤義清　才文武ヲ兼ネ、志尚高邁、鳥羽上皇ノ北面、左兵衛尉、薩髮西行ト號ス、建久元年寂、年七十三、

藤原成親　家成子、平氏ヲ滅サントト謀リ、備前兒島ニ流サル、子成經亦鬼界嶋ニ流サル、

藤原通憲　實兼子、薩髮信西ト稱ス、宏才博覽、典故ヲ諳練ス、平治ノ亂ニ死ス、其著ニ本朝世紀、法曹類林等アリ、子成範、櫻町中納言ト稱ス、

源爲朝　爲義子、膂力絶倫、最モ射ヲ善クス、保元ノ亂、軍敗レ、擒シテ伊豆ニ流サル、

藤原實定　實能子、左近衛大將、建久二年薨、年五十三、德大寺ト稱ス、

源賴政　賴光玄孫、武略アリ、射ニ精シク、和歌ニ工ナリ、以仁王ニ勸メ兵ヲ擧ケ、敗死ス、年七十、子仲綱亦同シク死ス、

長谷部信連　爲連子、膽勇アリ、以仁王謀泄ル、信連宮ヲ守リ奮鬪ス、執ヘテ伯耆ニ流カサル、

平清盛　忠盛長子、保元平治ノ變功アリ、太政大臣ニ至ル、髮ヲ削リテ淨海ト曰フ、薨年六十四、

平重盛　清盛長子、忠謹武勇、中外意ヲ屬ス、小松內府ト稱ス、薨年四十二、

平宗盛　重盛弟、內大臣、壇浦ニ虜ハレ、子宗清ト同シク近江篠原ニ斬ラル、年三十九、

平經正　和歌ニ工ニ、琵琶ヲ善クス、一谷陷リ大藏谷ニ死ス、

平知盛　清盛子、權中納言、壇浦ノ敗、帝ニ殉ス、子知章、一谷ニ戰死ス、

平維盛　重盛長子、源氏ヲ伐ヶ、敗レ歸ル、後潛ニ屋嶋ヲ去リ、牟漏郡藤綱ニ匿ル、

平忠度　薩摩守、膂力衆ニ邁ク、和歌ヲ善クス、一谷ノ役、搏鬪シテ死ス、

平通盛　教盛子、源義仲ヲ越前ニ擊ヶ、敗レ還ル、一谷ノ役、力戰シテ死ス、

平清經　重盛子、西海ニ赴キ、一夜月ヲ觀テ、慷慨笛ヲ吹キ、海ニ投ス、

平重衡　一谷ノ役虜セラレ、鎌倉ニ赴ク、南都ノ僧請テ木津川ニ斬ル、

平教經　能登守、膂力衆ニ過ク、平氏中最モ武ヲ以テ著ハル、壇浦ノ役、力戰海ニ

投ス、年二十六、

平教盛　忠盛子、六波羅門側ニ居ル、門脇殿ト稱ス、壇浦ノ役、帝ニ殉ス、年五十七、

平頼盛　忠盛子、清盛異母弟、池大納言ト稱ス、源頼朝ニ恩アリ、獨リ京師ニ留マル、

平宗清　平頼盛ニ仕フ、頼朝ヲ擒シ、營救シテ之ヲ流ス、頼朝之ヲ德トシ、招ケトモ赴カス、

平資盛　重盛次子、和歌ヲ善クス、壇浦ノ敗、海ニ投シテ死ス、

平經盛　忠盛子、和歌ニ工ニ、笛ヲ善クス、壽永二年、海ニ赴テ死ス、時年六十一、子經正、敦盛、一谷ニ戰死ス、

藤原長方　福原遷都、獨リ京師ニ留マル、新都ノ不便ヲ極論ス、清盛俄ニ舊都ニ復ス、建久二年薨、年五十三、

藤原兼實　關白忠通子、典故ニ通シ治體ニ明ナリ、承元元年薨、年六十、日記ヲ玉海ト曰フ、月輪關白ト稱ス、子良經、

僧慈圓　藤原兼實弟、天台座主、和歌ヲ善クス、愚管抄ヲ著ハス、

僧法然　名源空、淨土宗ノ開祖、諡號圓光大師、

僧仁海　眞言宗小野派ノ祖タリ、

僧親鸞　眞宗兩本願寺ノ祖、諡號見眞大師、

僧榮西　明菴ト號ス、禪宗ノ祖、建仁寺ヲ開ク、千光國師ト諡ス、

平時忠　時信子、平氏ニ西海ニ從フヲ以テ流ニ處セラル、文治五年貶所ニ終ル、年六十、

清原頼業　大外記、明經博士、高倉帝ノ侍讀、當時ノ碩學タリ、車折社ハ其靈ヲ祭レリ、文治五年卒、年六十八、

鴨長明　菊大夫ト稱ス、鴨社氏人、管絃ニ通シ、和歌ヲ善クス、遁世隱居ス、四季物語、方丈記等ヲ著ハス、

僧俊寛　法勝寺執行、平康頼等ト平氏ヲ滅サントシ、鬼界嶋ニ流サル、

遠藤盛遠　院武者所、僧ト爲リ文覺ト名ク、頼朝ニ說キ兵ヲ擧ク、東寺神護寺ヲ再興ス、後佐渡ニ流サル、

藤原基實　忠通長子、年十六關白氏長者ト爲ル、薨年二十四、

藤原基房　忠通二子、關白ト爲ル、寛喜二年薨、年八十七、松殿或ハ中山ト稱ス、

源行家　爲義第十子、以仁王ヲ助ケ兵ヲ擧ク、後頼朝ト隙アリ、捕斬セラル、

源義經　小字牛若、義朝第九子、武略アリ、義仲ヲ伐チ京師ヲ平ラケ、平氏ヲ西海ニ滅ス、後陸奥ニ死ス、

大江廣元　匡房曾孫、源頼朝ヲ佐ケテ幕府ヲ建テ覇業ヲ定ム、嘉祿元年卒、年七十八、

中原親能　明法博士廣季子源頼朝ニ任遇セラレ、京師ヲ守衛ス、承元二年卒、年六十六、

三善康信　問注所執事トナル、承久ノ役、廣元ト議ヲ定メ軍ヲ京師ニ發ス、是歲卒、年八十二、

藤原經宗　經實子、保元ノ亂、信頼ニ黨ス、後潛ニ乘輿ヲ奉シ六波羅ニ幸ス、嘉祿元年薨、年七十一、

藤原經房　頼朝ノ總追捕使トナルヤ、與リテ力アリ、正治二年薨、年五十八、吉田ト稱ス、

藤原爲業　和歌ヲ好ミ記事ニ長ス、剃髮シ大原山ニ隱ル、名ヲ寂念ト改ム、弟寂超、寂然世呼ヒテ大原三寂ト曰フ、大鏡ヲ著ハス、

藤原俊成　聰慧和歌ヲ善クス、後鳥羽帝ニ寵遇セラレ、千載和歌集ヲ撰ス、五條三位ト稱ス、元久元年薨、年九十一、

藤原定家　俊成第二子、夙ニ和歌ニ名アリ、勅シテ新古今集ヲ撰セシム、仁治二年薨、年八十、

藤原家隆　和歌ヲ俊成ニ學ヒ、定家ト名ヲ齊シクス、嘉禎三年薨、年八十、壬生二位ト稱ス、

藤原爲家　定家子、和歌ヲ善クス、建治元年薨、年七十九、

藤原爲相　家冷泉ト號ス、嘉暦三年薨、年六十六、兄弟各、一家ヲ成ス、

藤原爲氏　爲家子、才思敏捷、能ク險題ヲ賦ス、弘安九年薨、年六十五、二條ト稱ス、

藤原實氏　土門御帝以下六朝ニ歷事ス、太政大臣トナル、常盤井ト稱ス、文永六年薨、年七十六、

藤原良經　兼實子、衆藝ニ博通ス、左大臣內覽攝政、建永六年暴死ス、後京極攝政ト稱ス、

藤原道家　良經子、攝政、建長四年薨、年六十、光明峯寺ト號ス、東福寺ヲ創建ス、其日錄ヲ玉藥ト曰フ、

藤原忠宗　家忠子、中納言、監要記ヲ著ハス、孫忠親、內大臣、中山ト稱ス、著ニ水鏡、山槐記等アリ、

源通親　雅通子、七朝ニ歷事ス、藤原兼實ト隙アリ、建仁二年薨、年五十四、和歌ヲ善クス、土御門ト號ス、

源通具　通親子、堀川ト號ス、勅ヲ奉シ藤原定家ト新古今和歌集ヲ撰ス、弟通光、

久我ト號ス、

藤原雅經　宗長弟、和歌ヲ善クシ、新古今和歌集ヲ撰スルニ與カル、飛鳥井ト曰フ、

阿佛尼　權大納言高家妻、薙髮シ阿佛ト曰フ、和歌ヲ善クス、著ニ十六夜日記、夜ノ鶴アリ、

藤原忠信　信清子、承久ノ役、淀ヲ守ル、越後ニ流サル、

藤原朝俊　承久ノ役、宇治ヲ守リ、賊陣ヲ冒シテ戰死ス、

藤原宗行　承久ノ役後、執ヘテ鎌倉ニ送ル、菊川ニ至リ句ヲ柱ニ題ス、駿河藍津ニ殺サル、年四十八、

藤原信融　承久ノ役、芋洗ヲ守ル、美濃遠山ニ斬ラル、

藤原光親　承久ノ役、數上書シテ之ヲ諫ム、聽カス、駿河加古阪ニ斬ラル、年四十六、

源有雅　承久ノ役、宇治ヲ守ル、甲斐板垣ニ斬ラル、年四十六、

藤原範茂　承久ノ役、宇治ヲ守ル、足柄山ニ殺サル、

藤原公經　實宗子、勢ヲ恃ミテ驕恣、寛元二年薨、年七十三、西園寺ヲ北山ニ營ム、

菅原爲長　寛元四年薨、年八十九、書ヲ善クシ和歌ニ工ナリ、朝廷ノ典故ニ練達ス、

藤原家實　從一位太政大臣、猪隈關白ト稱ス、

藤原基通　基實子、關白攝政、天福元年薨、年七十四、普賢寺ト號ス、

土佐經隆　藤原氏、從五位下、土佐守、畫ヲ善シ、繪所預トナル、始メテ土佐氏ヲ稱ス、

藤原信實　隆信子、右京大夫、正五位上、繪畫精妙、北野緣起畫傳等世ニ傳フ、名手ト稱ス、

宅摩證賀　法印ニ叙ス、畫ヲ善クシ、神佛鬼形ニ妙ナリ、

僧普門　名無關、南禪寺ノ開山、諡號大明國師、

僧辨圓　名圓爾、東福寺ノ開山、諡號聖一國師、

藤原宣房　家萬里小路、又吉田ト稱ス、元弘ノ難、宣旨ヲ齎シ高時ヲ諭ス、

藤原俊基　種範子、藤原資朝ト共ニ、興復ノ謀ニ參ス、北條高時鎌倉ニ押送シ、葛原岡ニ殺ス、

藤原資朝　家日野ト稱ス、俊基ト共ニ後醍醐帝ノ謀主トナル、事漏レ、佐渡ニ流シ殺サル、

藤原爲明　和歌ヲ以テ後醍醐帝ニ仕フ、北條高時拘ヘテ實ヲ問フ、和歌ヲ作リ

免サル、

藤原道平　家二條ト稱ス、元弘中、左大臣氏長者、二年薨、年四十八、法號後光明照院、

平成輔　惟輔子、元弘ノ難、勅ヲ奉シ義旅ヲ糾合ス、笠置陷リ、相模早河尻ニ殺サル、

源具行　師行子、後醍醐帝高時討伐ノ謀ニ預ル、笠置陷ル、近江柏原ニ殺サル、

藤原藤房　後醍醐帝ニ仕ヘ、機務ニ參與シ、屢直諫シ、聽カレス、竟ニ岩藏ニ入テ僧ト爲リ、終ル所ヲ知ラス、

藤原季房　藤房弟、北條高時之ヲ下野ニ遷ス、配所ニ薨ス、

藤原公宗　西園寺實衡子、家鎌倉ト相結フ、建武二年弑逆ヲ圖リ、事露レテ誅セラル、

藤原師賢　家花山院ト稱ス、後醍醐帝ニ代リ、延曆寺ニ往ク、笠置陷ル、下總ニ流サル、薨年三十二、和歌ヲ善クス、文貞公ト謚ス、

藤原雅忠　家坊門ト稱ス、延元中、駕ニ從テ延曆寺ニ幸ス、敵ヲ西坂ニ禦テ死ス、

藤原資名　俊光子、尊氏依テ廢主ノ宣ヲ請ヒ、天下遂ニ分レテ南北ト爲ル、

藤原定房　家吉田ト稱ス、尊氏京師ヲ犯ス、帝延曆寺ニ幸ス、定房歷代寶器ヲ收メ、追テ行在ニ及フ、後吉野ニ薨ス、

藤原良基　北朝ニ仕ヘ、關白氏長者トナル、博覽文才アリ、著書多シ、元中五年薨、年六十九、

藤原公賢　南北兩朝ニ仕フ、太政大臣、薨年七十、博覽多通、圓大曆ヲ著ハス、孫公定從一位左大臣、尊卑分脉ヲ著ハス、

源忠顯　有忠子、家六條又千種ト稱ス、後醍醐帝ニ隱岐ニ扈シ、從テ船上ニ幸ス、後叡山西坂ニ戰死ス、

藤原爲冬　爲世子、尊氏ノ反スルヤ、尊良親王ニ從テ東征ス、竹下ニ戰死ス、

藤原行房　家一條ト稱ス、後醍醐帝ニ隱岐ニ從フ、金崎城陷ルニ及テ死ス、

僧良忠　關白良實孫、殿法印ト稱ス、護良親王候人、後尊氏ニ殺サル、

藤原清忠　家坊門ト稱ス、吉野行宮ニ從フ、延元三年薨、

源親房　家北畠又中院ト曰フ、師重子、五朝ニ歷事シ、忠誠ヲ以テ稱セラル、神皇正統記、職原抄等ヲ著ス、南朝ノ元老、正平九年薨、

源顯家　親房子、建武元年、陸奥出羽ヲ鎮ス、後入援シ、阿部野ニ戰歿ス、時年二十一、贈從一位右大臣、

源定平　家中院ト稱ス、後醍醐帝ニ仕フ、數、足利氏ト戰フ、後僧ト爲リ、終ル所ヲ

知ラス、

僧虎關　名師錬、東福寺住職、文名アリ、元亨釋書ヲ著ス、貞和中寂ス、

僧玄慧　北小路ニ居ル、後醍醐帝ノ侍讀トナリ、始テ程朱ノ說ヲ講シ、正平五年寂ス、

藤原經忠　家平子、吉野ニ仕ヘ左大臣ト爲ル、正平七年薨ス、年五十一、

藤原康長　正平七年、後村上帝南走、賊帝ニ逼ル、康長力戰之ニ死ス、帝賴テ脫スルヲ得、

三條景繁　後醍醐帝ノ南遷、帝ヲ馬ニ上セ、神器ヲ荷ヒ、扈シテ賀名生ニ達ス、正平七年男山ニ戰死ス、

源顯能　源貞平子、親房ニ養ハル、數、足利氏ト戰フ、右大臣從一位、淮三宮ニ至ル、

源顯信　北畠顯家弟、數、足利氏ト戰フ、正平中、懷良親王ニ從ヒ、少貳賴尙ヲ筑前大原ニ討テ戰死ス、

藤原實世　家洞院ト稱ス、公賢子、後醍醐後村上二帝ヲ佐ケ、恢復ヲ勤ム、正平十三年八月薨、年五十一、

藤原師基　道平弟、數、足利氏ト戰フ、正平二十年薨、左大臣從一位ニ至ル、

藤原隆資　家四條ト稱ス、元弘正平ノ間、兵ニ將トシ數、尊氏ト戰フ、後村上帝男山ヨリ南ニ遁ル、隆資力戰之ニ死ス、和歌ヲ善クス、

藤原邦光　資朝子、年十三、佐渡ニ赴キ、父仇本間三郎ヲ斬ル、後村上帝ニ仕ヘ、左兵衞督ニ至ル、

花山院長親　家賀子、南朝ニ仕ヘ、大納言トナル、遁世シ明魏耕雲ト號ス、著書多シ、東山ニ居ル、

藤原隆俊　隆資子、屢、足利氏ト戰フ、文中二年、敵營ヲ襲ヒ之ニ死ス、和歌ヲ善クス、

藤原教基　師基子、足利義詮ヲ京師ニ討ツ、關白左大臣ト爲ル、

北畠顯泰　親房孫、伊勢國司、世々南朝ノ藩屏タリ、義滿ト謀リ南北ヲ和ス、應永九年十月薨、

卜部兼好　聰慧文才アリ、和歌ヲ善クシ、書ニ工、徒然草ヲ著ハス、

僧頓阿　和歌ニ工、兼好、淨辨、慶運ト四天王ト稱ス、文中元年死、年八十四、

僧疎石　號木訥、天龍寺ノ開山、諡號夢窓國師、

僧絕海　名中津、蕉堅ト號ス、學才アリ、詩及書ヲ善クス、嘗テ明ニ入リ、太宗ト唱和ス、應永十二年寂、

僧義堂　名周信、南禪寺ニ住ス、詩文ヲ善クシ、絕海ト俱ニ叢林ノ詞傑トナス、嘉

慶中寂、日工集ヲ著ハス、

足利義滿　義詮子、幼ニシテ大將軍トナリ、在職二十六年、天下ヲ一統ス、應永十五年薨、法名道義、

僧宗峯　名妙超、大德寺ノ開山、諡號大燈國師、

細川頼之　頼春子、足利義滿ヲ輔ケ、南北ヲ合セ海內ヲ一ニス、元中九年二月卒、

僧春屋　名妙葩、相國寺ノ開山、諡號普明國師、

僧關山　名慧玄、妙心寺ノ開山、諡號覺照國師、

僧如拙　應安中、京師相國寺ニ寓シ、畫ヲ能クス、

僧周文　春育ト號ス、相國寺ニ居ル、畫法ヲ如拙ニ受ケ、出藍ノ稱アリ、

僧國阿　時宗一派ノ祖、靈山正法寺ヲ興ス、

足利義教　義滿四男、在職十三年、嘉吉元年赤松滿祐ノ弑スル所ト爲ル、

足利義勝　義教子、在職三年薨、

多賀高忠　永享中、所司代トナリ、名アリ、軍陣聞書ヲ著ハス、

日野有光　削髮性光ト稱ス、從一位、嘉吉三年九月、南朝餘黨ト禁闕ヲ犯シテ死ス、

僧正徹　東福寺書記、和歌ヲ善クス、長祿二年五月寂、年七十九、

僧明兆　東福寺殿司、故ニ世ニ兆殿司ト稱ス、丹青ヲ善クシ、最モ佛畫ニ長ス、

足利滿詮　義詮第二子、權大納言從二位、應永二十五年薨、

足利義持　將軍義滿子、在職二十九年、正長元年薨、

足利義量　義持子、在職三年、應永三十二年薨、

僧一休　名宗純、大德寺四十七世、後酬恩菴ニ住ス、人ト爲リ高邁詩畫ヲ弄フ、文明十三年寂、年八十八、

足利義政　義教第二子、在職二十三年、延德二年薨、東山殿ト曰フ、

志乃宗信　足利義政ニ仕ヘ、香道及ヒ茶道ノ祖タリ、

觀世元重　音阿彌ト稱シ、觀世ト號ス、申樂ヲ以テ足利義政ニ仕フ、子孫世業トス、

藝阿彌　名眞藝、足利義政ノ同朋、畫ヲ能クス、

能阿彌　名眞能、春鶯齋ト號ス、畫ヲ能クス、

相阿彌　名眞相、字鑑岳、藝阿彌子、畫ヲ善クス、

僧珠光　足利義政ニ仕ヘ、茶事ヲ掌ル、

足利義視　義教第四子、僧トナル、義政命シテ還俗セシム、延德三年正月薨、年五十三、

足利義尚　義政子、在職十八年、延德元年薨、年二十五、
甘露寺親長　才學アリ、藏書ニ富ム、日記ヲ親長記ト云フ、明應九年薨、年七十七、
僧宗祇　聯歌ノ宗匠爲リ、朝廷花下ノ號ヲ賜フ、文龜二年歿、年八十二、
足利義澄　政知第二子、細川政元迎立、在職十五年、永正五年義植ニ迫ラレ、近江ニ走ル、
後藤祐乘　永正中ノ人、金屬彫刻ニ妙、子孫業ヲ傳フ、
僧雪舟　名等楊、入明シテ畫法ヲ究メ、山水人物花卉翎毛皆妙ニ詣ル、永正三年寂、年八十七、
小栗宗丹　自溪ト號ス、足利氏臣、薙髮相國寺ニ寓シ畫ヲ善クス、
足利義植　義視子、在職四年、大永元年管領細川高國ニ逐ハレ、淡路ニ走ル、
足利義晴　足利義澄子、在職二十五年、天文十九年薨、
足利義榮　義植孫、在職僅ニ八月、義昭ノ迫ル所ト爲リ、阿波ニ奔リ、大永十一年薨、
足利義輝　義晴子、在職二十年、永祿八年、松永久秀ノ弑スル所ト爲ル、
足利義昭　義晴第三子、在職六年、織田氏ノ逐フ所ト爲リ、足利氏亡フ、
中御門宣胤　明豐子、權大納言從一位在官四十六年、大永五年十一月薨、年八十四、日記ヲ宣胤卿記ト曰フ、
三條西實隆　實繼次子、永正中、內大臣、薙髮堯空ト號ス、學問淵博、深ク心ヲ皇室ニ盡ス、著書多シ、天文六年十月薨、年八十三、逍遙院ト號ス、
狩野正信　永仙ト號ス、足利氏ニ仕フ、畫家ノ中興ト稱ス、天文十八年歿、年九十七、子孫其業ヲ傳フ、
狩野元信　丹青ヲ以テ足利氏ニ仕フ、畫法ヲ一新ス、永祿二年十月卒、年八十四、
三條西公條　實隆次子、天文中右大臣、剃髮法名仍覺、著書多シ、永祿六年十二月薨、年七十七、稱名院ト號ス、
三條西實枝（又實澄）　公條子、天正七年、內大臣ニ歷任シ、薙髮法名豪定（或玄覺）、薨年六十九、
萬里小路惟房　秀房子、大納言、永祿中、正親町帝密勅ヲ信長ニ賜フヤ、與リテ力アリ、
立入宗繼　左京亮ト稱ス、世々御倉ノ事ヲ掌リ、資ヲ捐テ供御ヲ濟フ、正親町帝ノ時藤原惟房ニ說キ、密勅ヲ織田信長ニ傳フ、王室ノ中興此ニ基ス、
磯貝久次　近江山中人、立入氏ノ同族タリ、宗繼ヲ嚮導シテ、尾張清洲ニ至リ、密勅ヲ信長ニ傳フ、

和氣瑞策　驢菴ト號ス、清麻呂ノ後、醫ヲ業トス、正親町帝通仙院ノ號及家傳醫心方三十卷ヲ賜フ、

松永秀久　三好長慶ニ仕ヘ、威權ヲ京師ニ擅ニシ、足利義輝ヲ弑シ、三好氏ヲ滅ス、天正五年、織田氏ノ誅スル所ト爲ル、

前田玄以　德善院ト號ス、信長薨後、秀吉ニ事ヘ京師所司代トナル、治績アリ、文祿中卒、

僧日乘　氏ハ朝山、僧トナリ日乘ト曰フ、信長ニ任用セラレ、京師ノ政ヲ掌リ、宮闕ヲ修ム、

曲直瀨道三　天正中、天脉ヲ診シ、勅シテ翠竹院ノ號ヲ賜フ、歿年八十八、

細川藤孝　削髮玄旨ト稱シ、幽齋ト號ス、慶長十五年八月京師ニ卒、年七十七、

里村紹巴　豐太閤ノ時、連歌ヲ以テ鳴リ、豐公ニ寵用セラル、連歌家ノ祖ナリ、

海北友松　名紹益、元信ノ門ニ出ツ、朝鮮ニ渡リ宋ノ梁楷ノ法ヲ學ヒ、一家ヲ成ス、慶長二十年歿、年八十三、

吉田了以　名光好、大ニ水理ニ通シ、舟楫ノ利ヲ興ス、慶長十九年七月歿、年六十一、

今出川晴季　右大臣從一位、深ク秀吉ニ結托ス、元和三年二月薨、年七十九、

丹波全宗　素ト叡山ノ僧、醫トナリ、法印施藥院使ニ叙任ス、盛ニ施療ヲナス、藥樹院ヲ興ス、

藤原肅　字欽夫、惺窩ト號ス、冷泉爲純ノ子、程朱ノ學ヲ以テ帷ヲ京師ニ下ス、本邦儒者ノ中興トス、卒年五十九、

木下勝俊　家定子、小濱ノ城主、封ヲ失ヒ世ヲ遁レ、長嘯子ト號ス、和文歌ヲ善クシ、風流文墨ヲ以テ終ル、

二條昭實　關白晴良ノ男、關白トナル、元和元年、德川家康ト元和令ヲ制定ス、同五年薨、年七十四、

吉田素庵　了以長子、父志ヲ繼キ、大ニ水利ヲ興ス、又書ヲ能クス、元和九年六月歿、年六十二、

藤木敦直　賀茂祠官、空海ノ書法ヲ傳ヘ、書博士トナル、寛永年間歿、

僧崇傳　丹後一色氏ノ孤ナリ、僧トナリ、後南禪寺金地院ニ住ス、德川家康ノ知遇ヲ受ケ、機務ニ參與ス、專ラ外交法制ノ事ヲ掌ル、寛永十年寂、年六十五、

左甚五郎　京師室町六條ニ居ル、彫刻ヲ以テ世ニ著ハル、寛永十一年四月歿、年四十八、

狩野山樂　名ハ光賴、業ヲ狩野永德ニ受ク、豐太閤ニ仕ヘ、修理亮ト稱ス、寛永十

二年八月歿、年七十七、

本阿彌光悅　光心養子、刀劍ノ鑒定、磨礪、淨拭三事ヲ善クス、又書ニ妙ナリ、寛永十四年二月、歿年八十、

瀧本坊昭乘　松花堂ト號ス、八幡瀧本坊住職、書畫ヲ善クシ一家ヲ成ス、寛永十六年歿、

小堀政一　宗甫ト號ス、從五位下遠江守、茶道ヲ好ミ一家ヲ成ス、又建築造園ノ妙ヲ極ム、正保四年卒、年六十九、

那波活所　名觚、字道圓、播磨人、京師ニ寓ス、惺窩ノ門人、正保五年正月歿、年五十四、

板倉勝重　伊賀守ニ任シ、京都所司代トナル、在職二十年、寛永元年卒、年八十三、

板倉重宗　勝重子、周防守、父ニ代リ所司代トナル、裁斷明決、明曆二年卒、年七十、

三宅嶋　字亡羊、號ハ寄齋、後陽成上皇後水尾天皇ノ內旨ヲ承ケ、經ヲ便殿ニ講シ、屢顧問ニ備ハル、慶安二年六月歿、年七十、

松永貞德　久秀弟、和歌聯句ヲ善クス、花咲翁ト稱ス、承應二年十月歿、年八十三、

紀宗直　從四位上、若狹守、寶石類書二百卷ヲ編ス、

狩野永納　山雪長子、山靜ト號シ、縫殿助ト稱ス、本朝畫史ヲ著ス、

中院通村　通勝子、武家傳奏タリ、後水尾帝讓位ノ時、機密ニ關シ、幕府ノ幽閉スル所トナル、和歌ヲ善クシ、盛名アリ、

藤原公信　德大寺右大臣、後光明帝ニ仕ヘ、忠直ヲ盡ス、

奥八郎兵衛　後光明帝崩スルヤ、死ヲ以テ火葬ヲ止メント請フ、事聞ス、勅シテ火葬ヲ止ム、

朝山意林庵　名素心、承應二年、後光明帝召シテ易經ヲ殿上ニ講セシム、

松永昌三　名遐年、字昌三、尺五ト號ス、惺窩ノ門人、明曆三年歿、年六十六、

林信勝　四條ノ人、道春ト號ス、儒ヲ以テ德川幕府ニ事フ、明曆三年正月卒、年七十五、其家世文柄ヲ掌ル、

野村仁清　朝鮮歸化人ニ就テ陶法ヲ學ヒ、巧妙ヲ極ム、仁和寺ノ宮ニ仕ヘ、清左衛門ト稱ス、故ニ仁清ト號ス、万治中歿、

江村宗具　專齋ト號ス、齡百歲、後水尾上皇徵シテ修養ノ術ヲ問フ、老人雜話ヲ著ス、寛永四年九月歿、

狩野守信　探幽ト號ス、法印ニ叙ス、丹青巧妙、畫風爲ニ一變ス、延寶中歿、

戴曼公　明末ノ遺民、本朝ニ歸化シ、學問書札ヲ以テ著ハル、種痘法ヲ傳フ、

堀正意　字敬夫、杏菴ト號ス、近江人、京師ニ寓シ法眼ニ叙ス、寛文中歿、年五十八、

家世業ヲ傳フ、

僧元政　妙子ト號ス、學内外ヲ綜ヘ、詞章ニ工、瑞光寺ニ栖遲ス、寛文八年沒、年四十六、著書多シ、

松野元敬　松整ト號ス、寛文中、扶桑京華志三卷ヲ著ス、

黑川道祐　古典ヲ修メ、心ヲ平安ノ舊事ニ留ム、雍州府志、遠碧軒雜誌ヲ著ハス、

梨木祐之　桂齋ト號ス、下鴨ノ祠官、正三位、日本逸史ヲ編纂ス、享保八年卒ス、孫祐爲亦著ハル、

石川丈山　名重之、一名凹、致仕ノ後、詩仙堂ヲ一乘寺村ニ構フ、後水尾帝召セトモ出テス、

僧隱元　名隆琦、明人、歸化シテ黃蘗山萬福寺ノ開山トナル、

僧白慧　山城名跡志ヲ著ハス、

山崎敬義　闇齋ト號シ、嘉右衞門ト稱ス、神儒佛三教ヲ合シ、一家學ヲ立ツ、天和二年歿、年六十五、

熊澤了介　蕃山ト號ス、古今ノ通儒、備前芳烈公ニ仕ヘ、政績大ニ著ハル、元祿四年古河ニ歿、年七十三、

木下貞幹　字直夫、順菴ト號ス、學德ヲ以テ稱セラル、元祿十一年十二月病歿、年七十八、鳩巢、白石等名家多ク其門ニ出ツ、木門十哲ト稱ス、

松下見林　名慶攝、心ヲ本朝典故ニ留メ、著述多シ、帷ヲ堀川ニ下ス、元祿十六年歿、年六十七、

尾形光琳　名方祝、字崇道、青々堂ト號ス、畫法一家ヲ成ス、最モ漆器ニ妙、享保元年歿、年五十六、

尾形乾山　名眞省、光琳弟、畫法家兄ニ似タリ、又陶器ニ妙、寛保三年歿、年八十一、

後藤艮山　名達、字有成、江戸人、京師ニ住ス、古方醫術ノ祖タリ、享保十二年歿、年七十五、

伊藤維楨　字原佐、仁齋ト號ス、古學ヲ唱ヘ、名一世ニ振フ、五子皆著ハル、寶永二年歿、子孫相繼キ以テ今ニ至ル、

安藤素軒　名爲實、朴翁ト號ス、從五位下右兵衞尉、皇朝ノ古典ニ通ス、水戸彰考館ノ總裁タリ、禮儀類典ヲ編纂ス、

安藤爲章　爲實弟、亦水戸ニ聘セラレ、大日本史ノ編纂ニ預カル、年山打聞ヲ著ハス、

栗山潛峯　名愿、王室式微ヲ慨シ、保建大記ヲ著ハシ、尙仁親王ニ上ル、後水戸彰考館總裁ト爲リ、大日本史ヲ修スルニ預カル、寶永三年歿、年三十七、

今井似閑　見牛ト號ス、國學ヲ僧契仲ニ受ク、終ニ臨ミ其藏書ヲ上加茂ノ神庫ニ納ム、

淺見綱齋　名安正、山崎闇齋ヲ師トス、操行峻厲、太上皇召セトモ出テス、正德元年歿、年六十、靖獻遺言ヲ編シ、以テ世ヲ警ム、

北村可昌　字伊平、篤所ト號ス、靈元上皇儒服儒巾ヲ賜ヒ、書ヲ洞宮ニ講セシム、享保三年歿、年七十二、

並河五一　名永、享保十九年、五畿內志ヲ撰ス、

並河天民　名亮、字簡亮、才學絕倫、上疏シテ蝦夷ヲ以テ內屬トセントス、果サスシテ歿ス、

野宮定基　有職學ニ通シ、新井白石常ニ其教ヲ乞フ、

三宅緝明　字用晦、觀瀾ト號ス、水戸ニ聘セラレ、國史編纂總裁トナリ、大日本史ヲ修ムルニ預カル、享保年間歿、

伊藤長胤　字原藏、東涯ト號ス、仁齋ノ子、著ハス所皆有用書、元文元年歿、年六十七、子善韶、東所ト號ス、亦家聲ヲ墜サス、

荷田春滿　族羽倉、伏見稻荷ノ祠官、大ニ國學ヲ唱フ、幕府ニ建議シ學校ヲ京師ニ興サントヲ請フ、元文元年歿、年六十九、著書多シ、姪在滿、國歌八論ヲ著ハス、

中村之欽　字敬甫、惕齋ト號ス、程朱ノ學ヲ修ム、元文中歿、比賣鑑等著書多シ、

三輪執齋　名希賢、字善藏、陽明學ヲ唱フ、寬保中歿、年七十六、

宇野鼎　字士新、初メ李王ノ說ヲ奉シ、後一家ヲナス、延享二年歿、年四十八、弟鑑、字士朗、學術兄ニ減セス、先テ歿ス、年三十一、

雨森芳洲　名東、字伯陽、對馬侯ニ仕ヘ、韓人ニ接對シ、名聲內外ニ馳ス、歿年八十八、

藤原光胤　烏丸權大納言、寶曆八年、有志ノ公卿德大寺公城等、王政復古ヲ謀リ、永蟄居トナル、光胤其魁首タリ、

藤原公城　德大寺權大納言、藤原光胤等ト王政復古ヲ謀リ、共ニ永蟄居ト爲ル、

藤原光世　裏松左少辨、寶曆ノ變、永蟄居トナル、薙髮固禪ト號ス、大內裏圖考證、日本春秋等ヲ著ハス、

香川修德　字太沖、秀菴ト號ス、播磨人、京師ニ寓ス、醫ヲ後藤艮山ニ學ヒ、刻苦一家ヲ成ス、寶曆五年歿、年七十三、

服部元喬　字子遷、南郭ト號ス、詩及ヒ古文辭ヲ以テ教授ス、寶曆九年歿、年七十七、

賣茶翁　名元照、月海ト號ス、禪ニ通シ詩ヲ好ム、後高遊外ト稱シ、岡崎ニ居ル、煎

茶家ノ祖タリ、寶暦十三年歿、年八十九、

山脇東洋　名尚德、字玄飛、通稱道作、禁裡附御醫、初メテ解剖ヲ行ヒ、臟志ヲ著ハス、寶暦中歿、

藤井右門　名定之、大和守ト稱ス、寶暦ノ變、亡命江戸ニ遊ヒ、山縣大貳ト王政復古ヲ謀リ、明和四年梟首セラル、

竹內式部　正庵ト號ス、寶暦中藤原光胤等ト討幕ノ事ヲ謀リ、明和中遠島ニ處ス、

吉益東洞　名爲則、京師ニ住シ、古醫方ヲ唱ヘ、海內ヲ風靡ス、安永二年歿、年七十二、

池野大雅　字貸成、秋平ト稱ス、西陣人、風流高雅、畫法一家ヲ成ス、安永四年歿、年五十四、

賀川子玄　名玄悅、醫ヲ業トシ、產科ヲ發明シ、產論ヲ作リ、大ニ世ニ行ハル、子孫其業ヲ傳フ、

玉瀾　名町子、百合女ノ女、才情ニ富ミ、歌ヲ好ミ、畫ヲ善クス、池大雅ニ嫁シ、玉瀾ト號ス、祖母梶女、祇園茶亭ニ居リ、歌ヲ善クス、其集ヲ梶葉ト曰フ、

富士谷成章　字仲達、皆川愿弟、學和漢ニ通ス、安永八年歿、年四十二、其子御杖亦著ハル、

謝蕪村　名長庚、後寅ト改ム、丹後與謝ニ遊ヒ、其山水ヲ愛シ、謝氏ト改ム、天明三年歿、年六十八、

曾我蕭白　名輝一、蛇足軒ト號ス、明和中ノ人、畫風一格ヲ成ス、

高芙蓉　名孟彪、字孺皮、桃花坊ニ客居シ、篆刻ニ名アリ、

江村綬　字君錫、北海ト號ス、詩文ヲ以テ名アリ、著ニ日本詩選等數種アリ、

圓山應擧　字仲選、仙嶺ト號ス、畫ヲ石田幽汀ニ學ヒ、後一家ヲ成ス、探幽以來畫風此ニ一變ス、寬政七年歿、年六十三、

伊藤若沖　名汝鈞、斗米翁ト號ス、畫法一家ヲ成ス、寬政十二年歿、年八十五、

龍草廬　名公美、字君玉、伏見人、詩及書ヲ以テ名アリ、

秋里籬島　名舜福、字湘夕、京ノ水、都名所圖會等ヲ著ハス、

小澤蘆庵　名玄仲、通稱帶刀、詠歌ヲ修メ、苦學妙ニ臻ル、平安四大家ノ魁タリ、享和元年歿、年七十九、

僧蕉中　名常、字大典、相國寺慈雲菴ニ住ス、傍ラ經學ニ通シ、文章ヲ能クス、享和元年寂、年八十三、

僧六如　名慈周、字六如、京師惠恩院ニ居ル、詩ヲ善クス、享和元年寂、年六十三、

伴蒿蹊　名資芳、篤學文章ヲ能クシ、尤モ和歌ニ長ス、文化三年歿、年七十四、

吳春　字伯望、月溪ト號ス、畫ヲ善クス、文化八年七月歿、年五十六、

皆川愿　字伯恭、淇園ト號ス、一家學ヲ唱ヘ、又書畫ヲ能クス、著書多シ、文化四年歿、年七十四、

藤井貞幹　字子冬、通稱叔藏、無佛齋ト號ス、好古ノ學ニ精シク、著書多シ、文化中歿、

村瀨栲亭　名之熙、字君績、儒ヲ業トシ、兼テ書畫ヲ善クス、文化中歿、

上田秋成　古學ヲ修メ、隱操アリ、和歌ヲ善クス、文化七年歿、年七十八、

小野職博　蘭山ト號ス、松岡恕菴ニ從ヒ、本草ノ學ヲ唱フ、歿年八十二、本草啓蒙ヲ著ハス、

藤原愛親　中山大納言、尊號ノ事ヲ以テ、幕府ニ臨ミ、大ニ其事ヲ辯シ、禁錮免職セラル、當時ノ名臣タリ、

岸駒　字賁然、佐伯氏、畫法沈南蘋ヨリ出ツ、從五位下越前守ニ叙任ス、天保九年歿、年九十、

藤原有功　千種正三位、和歌及ヒ書畫ヲ善クシ、其名甚タ高シ、

賀茂季鷹　山本氏、上賀茂祠官、正四位下安房守、和歌及ヒ狂歌ヲ善クス、天保十三年歿、年九十一、

猪飼敬所　名彥博、字文卿、篤學謹行、經學ニ長ス、藤堂侯ニ重セラル、天保中歿、年八十餘、

賴襄　山陽ト號ス、字子成、文章節概ヲ尙フ、著書大ニ世ニ行ハル、天保三年歿、年五十三、

香川景樹　東塢又桂園ト號ス、和歌ヲ善クシ、一家ヲ成ス、名聲藉甚、天保十四年歿、年七十四、

松村景文　月溪ノ弟、畫法ヲ家兄ニ受ケ、花鳥ヲ善クス、弘化元年歿、年六十五、

伴信友　通稱州五郎、本居宣長ニ學ヒ、考證ニ長ス、著書數百部、弘化三年京師ニ歿ス、年七十四、

嚴垣松苗　字長尊、東園ト號ス、從五位上音博士、國史略ヲ著ハス、嘉永三年卒、

中島規　字景寬、棕隱ト號シ、詩ヲ以テ著ハル、安政二年歿、年七十七、

新宮凉庭　名碩、驅豎齋ト號ス、專ラ西洋醫方ヲ唱フ、順正書院ヲ建テ、後進ヲ誘掖ス、嘉永七年歿、

淺野長祚　安政年間、京都町奉行トナル、能吏ヲ以テ稱セラル、安政內裡造營誌ヲ著ハス、

村井正禮　藏人所衆、正六位、修理少進、安政中、尊攘ノ議ヲ唱ヘ、刑セラル、年三十七、

藤原實萬　三條內大臣、孝明帝ヲ佐ケ大ニ力ヲ國事ニ盡ス、幽閉中薨ス、後文成公ト謚ス、

小林良典　鷹司家ノ諸大夫、其主ヲ輔ケ尊攘ヲ唱ヘ、幕府ニ捕ヘラレ、病テ獄中ニ死ス、年五十二、

梁川星巖　名孟緯、字公圖、詩ヲ以テ鳴ル、幕府ノ末、正議ヲ唱フ、病テ暴ニ歿ス、其妻紅蘭詩畫ヲ善クシ、夫妻併セ稱セラル、

浮田一蕙　名可爲、禁裏畫院寄人、憂國ノ意ヲ畫ニ寓シ、以テ世ヲ諷ス、安政戊午、追放セラル、沒年六十五、

賴醉　字子春、三樹ト號シ、山陽第三子、學業家名ヲ墜サス、安政中攘夷密勅ニ關シ、幕府ニ刑セラル、年三十五、

梅田定明　雲濱ト號ス、京師ニ住シ、儒ヲ業トス、安政中正議ヲ以テ幕府ニ捕ハレ、病テ歿ス、

僧忍向　成就院住職、月照ト稱ス、安政中、弟信海ト攘夷ノ事ニ盡力ス、幕吏ニ迫ラレ、薩海ニ死ス

僧信海　忍向弟、安政元年、兄ニ嗣キ成就院ニ住シ、幕吏ニ捕ハレ、獄中ニ歿ス、

平塚飄齋　幕府與力、山陵荒廢ヲ慨シ、陵墓一隅抄、聖蹟圖志、華洛名勝圖會等ノ著アリ、

飯田忠彥　字子邦、有栖川宮ニ仕フ、安政中、親王獻言ノ事ニ與カリ、幕府謹愼ヲ命ス、後自殺ス、野史ヲ著ハス、

中山忠光　忠能第三子、從四位下侍從、文久中、兵ヲ大和ニ起シ、後長門ニ卒ス、年二十二、

藤原公知　姉小路少將、三條實美ト共ニ力ヲ王事ニ盡シ、賊ノ殺ス所ト爲ル、年三十、

賀名海屋　名苞、字君茂、晩ニ菘翁ト號ス、書畫ヲ以テ鳴ル、京師ニ住ス、文久三年歿、年八十六、

尼蓮月　和歌ヲ善クシ、別ニ機軸ヲ出ス、高雅風流、其名甚高シ、明治初年歿、

藤原實美　文成公實萬子、中興元勳、國家柱石、事ハ近世史ニ詳ナリ、明治二十四年二月、東京ニ薨ス、年五十六、勅シテ國葬ヲ賜フ、

岩倉具視　具慶子、其事近世史ニアリ、明治十六年七月薨、年五十九、正一位太政大臣ヲ贈リ、國葬ヲ賜フ、

津崎村岡　近衞家老女、安政中尊攘論ニ周旋シ幕府ニ禁錮セラル、明治六年歿、年八十八、

玉松眞弘　山本公弘ノ二子、幼ニシテ僧トナリ、後髮ヲ蓄ヘ、自カラ氏名ヲ撰ス、又操ト曰フ、岩倉公ヲ輔ケ、大政復古ノ大計ヲ畫シ、神武創業ニ基ツクノ議ヲ建ツ、特ニ堂上ニ班シ、從五位大學博士侍讀トナル、官ヲ辭シ隱居ス、卒年六十三、

平安通志卷之三十八

第二編

陵墓志

湯本文彦等編

陵墓志凡例

一陵墓志ハ京都及山城國ニ在ル陵墓ヲ記ス、其次序ハ山陵ヲ主トシ、式墓之レニ次ギ、其ヨリ皇妃、皇族、公卿、武將、學者、方技、名僧、女流等類ニ從ヒ、概ネ其年代ヲ以テ之ヲ記ス、但シ式墓以下ハ、一々部分セス、

一山陵ハ今日既定ノモノヲ記ス、其他未タ確定セサルモノハ、姑ク舊說ニヨリ之ヲ記ス、

一其名稱ハ式墓ハ其墓稱ヲ記シ、以下ハ某墓ト記ス、必スシモ義例アラサルナリ、

一千百年間有名ノ人物固ヨリ多シ、然レトモ今其墓ノ存スルモノ、十中ノ一ニ及ハス、且ツ眞墓影塔ノ判シカタキモノ多シ、猶增訂スル所アルヲ期ス、

舊制ヲ案スルニ、山陵ヲ以テ宗廟ニ充ツ、故ニ歷朝ノ皇祖皇宗ヲ祀ル、神宮ヲ除ク外、皆山陵ニ於テス、故ヲ以テ山陵ノ制最モ嚴ナリ、其職ハ治部省ニ諸陵寮アリ、以テ其事ヲ掌トル、喪葬ノ禮、供幣ノ典具ニ備ハリ、吉凶ノ事アル、必ス之ヲ奉

告ス、陵ニ守戸ヲ置キ、樵牧ヲ禁シ、兆域ヲ正シ、垣溝ヲ修ス、各儀則アリ、特ニ律ニ謀テ山陵ヲ毀ツ、之ヲ謀大逆トシテ、八虐ノ一ニ處ク、其山陵ヲ重シ祖宗ヲ敬スル厚シト謂フヘシ、故ニ淳和帝ノ遺詔シテ山陵ヲ作ルヲ停ムルヤ、中納言藤原吉野奏シ曰ク、山陵ハ猶宗廟ノ如シ、苟モ之アルナクンハ、臣子何ヲカ仰カント、旨アルカナ、中世戰亂相踵キ、皇綱紐ヲ解キ、諸陵寮已ニ廢シ、奉幣使亦絶エ、兆域ヲ侵シ陵樹ヲ伐リ、甚シキニ至リテハ、玄室ヲ發キ殉寶ヲ奪フ、狐狸ノ栖ム所、荊棘ノ生スル所、大半其所在ヲ失フ、平安京ニ至リテハ、佛法益盛ンニ、荼毘大ニ行ハレ、塔宇ヲ以テ山陵ニ代ヘ、加フルニ兵火相依リ、益堙滅ニ就ケリ、初メ水戸侯德川光圀修理ノ志アリ、故有リテ果サス、元祿中將軍德川綱吉令シテ遍ク古蹟ヲ搜リ、新ニ藩籬ヲ設ケ、采樵ヲ禁ス、之ヲ元祿諸陵ノ修理ト曰フ、蓋シ柳澤吉保ノ家臣細井知愼ノ建議ニ出テシト云フ、此際松下見林前王廟陵記ヲ著シ、以テ時世ヲ警ム、尋テ享保中蒲生秀實痛ク王室ノ式微ヲ慨キ、山陵ノ荒廢ヲ哀ミ、躬カラ山河ヲ跋涉シ、舊址ヲ尋ネ古記ニ徵シ、山陵志ヲ著ハス、此ニ於テ山陵修理ノ說大ニ興ル、文久二年宇都宮藩主戸田氏請テ諸陵修補ノ任ニ當リ、其族戸田大和守代テ其事ヲ督シ、慶應元年ノ秋ニ至リ、修陵ノ功全ク成ル、此時北浦定政、山川正宣、津久井清影、谷森種桑ノ徒、互ニ舊蹟ヲ探尋シ、發明スル所多シ、其陵制京都近傍ニ於テハ、天智帝山階陵、桓武帝柏原陵ノ外、概ネ狹小古制ヲ存セス、其他ハ山壠又ハ塔堂ニ過キス、故ヲ以テ其考索最モ難シト云フ、明治維新諸陵寮ヲ宮內省ニ置キ、更ニ考證ヲ加ヘ、其兆域ヲ增シ修補ヲ加ヘ、陵掌墓丁ヲシテ之ヲ守衞セシメ、時ヲ以テ祭儀ヲ行フ、今平安京及ヒ山城國ニアル山陵及ヒ式內諸墓ヲ錄シ、幷ニ有名ナル墳墓ヲ記ス、然レトモ千百年ノ久シキ、其數能ク盡ク記スル所ニアラス、唯其大略ヲ揭クルノミ、

山陵

山階陵 天智天皇

宇治郡山科村大字御陵ニアリ、其地ヲ御廚野ト云フ、延喜諸陵式ニ曰ク、近江國大津宮御宇天智天皇在山城國宇治郡、兆域東西十四町、南北十四町、陵戸六烟ト是ナリ、天皇大葬ノ事ハ、日本書紀、萬葉集ニ在リ、其他ノ說信スヘカラス、此山陵ハ歷朝崇敬特ニ厚ク、永ク近陵ニ列シ、大事アレハ必ス奉告ノ勅使アリ、中古以來大ニ荒頹セシヲ、近年修營アリテ、儼然タル御陵トナレリ、

柏原陵 桓武天皇

紀伊郡堀內村ニアリ、封境東西六十間、南北五十間、延喜諸陵式ニ曰ク、在山

城國紀伊郡、兆域東八町、西三町、南五町、北六町、加二丑寅角二岑一谷、守戸五煙ト、同制近陵ニ屬シ、頒幣ノ例ニ入ル、延曆二十五年三月帝ノ崩スルヤ、陵地ヲ葛野郡宇太野ニト定ス、災異アリ、依テ改テ此ニ葬ル、龜山帝文永十一年盜山陵ヲ穿ツ、諸陵頭賀茂朝臣在爲等ヲ遣シ之ヲ檢セシム、復奏シテ曰ク、陵上毀ツ所、東西一丈三尺、南北一丈六尺餘、假ニ土ヲ以テ塡塞ス、其陵高十許丈、壇圍高八十餘丈、未タ陵中ヲ檢スルニ遑アラスト、陵地舊記稻荷山ノ南野、或ハ伏見山松原ノ中ト云フ、而シテ早ク其所在ヲ失フ、蓋シ豐臣秀吉桃山築城ノ時破壞セシナルヘシ、元祿九年松下見林前王廟陵記ヲ著シテヨリ以後、諸說頻リニ出テ、曰ク金冢松山、曰ク向ケ原、曰ク山伏冢、曰ク大兜、曰ク古御香近傍圓丘、曰ク火打谷ノ西南、曰ク龜前堂カ原、曰ク谷口古墳ト、皆非ナリ、獨リ谷口ノ古墳、元祿ノ檢討ニ以テ眞陵トナシ、文政四年叡山ノ僧堯覺有栖川韶仁親王ノ命ヲ奉シ、弟子堯雄ニ囑シ殿宇ヲ設ケシム、萬延元年功全ク成ル、影殿ト稱ス、堯雄尋テ別當トナリ、此ニ移住ス、慶應年中谷森種松柏原山陵考ヲ著シ、諸說ヲ辨駁ス、考據尤モ精確ナリ、是ヨリ先種松十數年間柏原ノ地ヲ踏査歷尋シ、始メテ城墟字三人屋敷ノ地ニ舊陵ヲ發見ス、今ノ所在是ナリ、明治十三年二月此ニ確定シ、大ニ修營ヲ加ヘラル、

嵯峨院山上陵 嵯峨天皇

葛野郡嵯峨村大字上嵯峨ノ北方長尾山ノ西御廟山ニアリ、面積五百五十六坪九合七勺五才、周圍九十七間三分、帝承和九年七月嵯峨院ニ崩ス、遺詔シテ山北幽僻不毛ノ地ヲ擇テ葬ラシム、後鳥羽帝ノ即位、山陵使ヲ遣ス、道路荒廢、之ヲ邑老ニ訪ヒ、僅ニ其處ヲ識ルコトヲ得タリト云フ、今古松巖石其頂ニ立テルノミ、

大原野西嶺上陵 淳和天皇

乙訓郡大原野村大字大原野小壇山頂清塚ニアリ、清一ニ經ニ作ル、遺詔シテ御骨ヲ粉碎シ、大原野西山ノ嶺上ニ散セシム、是其處ナリ、封土三間、面積百九十七坪二合九勺、小石ヲ聚積シ五圓塚ヲ築ク、火葬所、同郡向日町大字物集女ニアリ、土人廟處塚ト稱ス、面積四百五十二坪六合八勺、

深草陵 仁明天皇

紀伊郡深草村大字深草字伊達町ニアリ、東車塚ト稱ス、延喜諸陵式ニ曰、在二山城國紀伊郡、兆域東西一町五段、南七段、北二町、守戸五烟、全制近陵ニ屬シ、頒幣ノ例ニ入ル、清和帝貞觀三年、詔シテ四至ヲ定ム、東西一町五段ヲ限リ、

南純子内親王冢地ヲ限リ北峰ヲ限ル、八年四至ヲ改定ス、東大墓ニ至リ、南純子内親王冢ノ北垣ニ至リ、西貞觀寺ノ東垣ニ至リ、北谷ニ至ル、今兆域周圍百二十九間七分、陵西車塚アリ、貞觀六年女御藤原貞子薨ス、遺詔ニ遵テ域内ニ附葬ス、是レ其所カ、

田邑陵 文德天皇

葛野郡太秦村大字中野ノ北東御廟山ノ上字茶臼山ニアリ、田邑郷眞原岳ノ地ナリ、初メ眞原山陵ト稱シ、後改ム、延喜諸陵式ニ曰ク、在山城國葛野郡兆域東西四町、南北四町、守戸五烟、同制近陵ニ屬シ、頒幣ノ例ニ入ル、今封土高三間半、面積六百坪一合、

水尾山陵 清和天皇

葛野郡嵯峨村大字水尾ノ西清和山ノ半腹ニアリ、水尾本ト丹波國桑田郡ニ隷ス、兆域八百二十八坪四合七勺、老樹陰鬱、中央ニ五輪石塔ヲ置ク、

神樂岡東陵 陽成天皇

上京區淨土寺町ノ西南眞如堂ノ前字小山ニアリ、封土高一丈餘、兆域周圍八十五間六分、陵上松檟並ヒ生ス、

後田邑陵 光孝天皇

一ニ小松山陵ニ作ル、因テ小松帝ト稱ス、葛野郡花園村大字宇多野天皇塚ニアリ、高雄道ノ傍仁和寺ノ坤方ニ位ス、延喜諸陵式ニ曰ク、在山城國葛野郡田邑郷立屋里小松原、陵戸四烟、四至西限芸原岳岑、南限大道、東限清水寺東、北限大岑、同制遠陵ニ屬シ、頒幣ノ例ニ入ル、堀河帝嘉承元年是ヨリ先、覺行法親王僧房ヲ營造シ、陵地ヲ犯ス、已ニシテ山陵鳴動、適帝不豫、卜者謂フ、山陵崇ヲナスト、是ニ至テ使ヲ遣シテ謝ス、今兆域周圍百六十四間三分、陵上古松ヲ生ス、乾隅別ニ一家ヲ存ス、老杉アリ、舊ト愛宕田七本杉ト呼フ、陵形方正ニシテ、構造完全ナリ、

大内山陵 宇多天皇

葛野郡花園村大字宇多野字大内山谷ノ中央ニアリ、所謂仁和寺ノ奥池尾山ノ地ニシテ、土人天皇塚ト稱ス、宇多カ池亦近傍ニアリ、承平元年七月帝崩ス、大内山ニ火葬ス、遺詔ニ因テ國忌山陵ヲ置カス、元暦元年八月山陵使仁和寺ニ到リ所在ヲ問フ、知レスシテ空ク歸ル、事山槐記ニ出ツ、今兆域東西十七間八分八厘、南北二十間五分三厘、陵上古松一簇アリ、

後山科陵 醍醐天皇

宇治郡醍醐村小野隨心院ノ東字古道ニアリ、舊記ニ云フ、兆域東西八町、南

北十町、壙深九尺、方廣三丈、校倉高四尺三寸、縱橫各一丈、御棺ヲ倉ニ安シ、陵戸五烟、徭丁廿五人ヲ置ク、今周圍百四十四間九分、陵上樹竹茂生ス、古小野寺ノ地ナリ、小野寺或ハ曼陀羅寺ト云フ、陵寺邊ニ在ルヲ以テ、小野帝或ハ後山科帝ト稱ス、

醍醐陵 朱雀天皇

宇治郡醍醐村後山科陵ノ南三町許字御陵人家ノ東裏ニアリ、兆域三百六坪三合六勺、天曆六年八月來定寺ノ北野ニ葬リ、御骨ヲ此ニ置ク、

村上陵 村上天皇

葛野郡宇多郷ニ葬リ、陵戸五烟ヲ置ク、今同郡花園村大字宇多野福王子ノ北妙高寺ノ後山ニアリ、兆域周圍八十二間六分、陵形六角、域內松樹群生ス、

櫻本陵 冷泉天皇

上京區鹿ケ谷町法然院前野ニアリ、兆域周圍二百十七間六分、寛弘八年十一月櫻本寺ノ前ニ葬リ、遺骨ヲ山側ニ藏ス、

火葬所、本陵ヲ坤方ニ去ル百餘間字御廟所ニ在リ、兆域周圍七十七間、方形ニシテ、松檜數株ヲ植ウ、

後村上陵 圓融天皇

葛野郡花園村大字宇多野福王寺善福寺ノ傍藪林中ニアリ、兆域周圍六十六間、封土高凡一間半、東向ス、

火葬所、同郡花園村大字谷口春日谷原山ノ頂ニアリ、兆域東西二十間五分九厘、南北十九間二分、陵上古松巖石起伏ス、

法恩寺北陵 華山天皇

葛野郡衣笠村大字大北山ノ中央人家ノ東背ニアリ、東西十八間、南北二十間、周ラスニ湟水ヲ以テシ、陵上菩提樹アリ、松杉圍ミ生ス、

圓融寺北陵 一條天皇

葛野郡花園村大字谷口春日谷原山ノ官山中ニアリ、堀河帝陵ト相並フ、帝遺詔シテ御骨ヲ此ニ藏メシム、群臣方忌ヲ避ケ、權ニ圓成寺ニ置ク、後一條帝寛仁四年ニ至ツテ此ニ遷ス、

火葬所、同郡衣笠村大字大北山ノ北境岩ノ東字北谷小山ニアリ、兆域周圍八十七間九分、土墳隆崇、雜木林立ス、

北山陵 三條天皇

葛野郡衣笠村大字大北山金閣寺前ノ北三町許左大字山下ニアリ、兆域周圍九十五間六分、封土高凡五尺、陵上ニ松ヲ植ウ、此地舊ト尊上院ト稱ス、蓋

シ三條院ノ訛カ、

菩提樹院陵 後一條天皇

上京區吉田町神樂岡ノ東麓ニアリ、兆域周圍百四十八間五分、陵上圓形、松樹雜木生ス、

圓乘寺陵 後朱雀天皇

葛野郡花園村大字谷口主山ノ麓龍安寺方丈ノ北背敷十歩ニ在リ、後冷泉後三條兩帝陵ト相並フ、

火葬所、同郡衣笠村大字小北山字御屋敷ニアリ、香隆寺乾原トイフ地是ナリ、

圓教寺陵 後冷泉天皇

葛野郡花園村大字谷口主山ノ麓ニアリ、後朱雀後三條兩帝陵ト相並フ、

火葬所、愛宕郡野口村大字東紫竹大門字神輿道南ニアリ、

圓宗寺陵 後三條天皇

葛野郡花園村大字谷口主山ノ麓ニアリ、後朱雀、後冷泉兩帝陵ト相並フ、封土高各一間半、兆域周圍通シテ百十二間四分、南面ス、陵上並ニ松ヲ植ウ、

成菩提院陵 白河天皇

紀伊郡竹田村ニアリ、淨梵天王ト稱ス、成菩提院ヲ訛ルナリ、兆域東西二十一間、南北十七間、陵上雜木生ス、大治四年七月香隆寺乾野ニ火化シ、御骨ヲ同寺ニ置ク、後此ニ遷ス、

火葬所、葛野郡大字大北山ノ西字馬場ニアリ、兆域東西十三間五分五厘、南北十三間四分、後朱雀帝荼毘所ヲ北ニ距ルコト廿六七間許、

後圓教寺陵 堀河天皇

葛野郡花園村大字谷口春日谷原山ノ官山中ニアリ、一條帝陵ト相列ス、封土高一間半、兆域兩陵ヲ通シテ、東西二十間二分、南北二十間、陵上松アリ、嘉承二年七月香隆寺ノ坤原ニ葬リ、御骨ヲ同寺ニ置ク、天仁元年三月此ニ移ス、

火葬所、同郡衣笠村大字等持院ノ巽位田間字坊臺ニアリ、周圍六十一間六分、

安樂壽院陵 鳥羽天皇

紀伊郡竹田村ニアリ、東面ス、東西十四間、南北十一間ヲ陵域トス、保元元年七月帝崩ス、即夜ニ葬リ、塔ヲ以テ山陵ニ擬ス、蓋遺詔ニ因ル、今ノ御塔慶長十七年九月ノ建設ニシテ、假堂タリ、慶應元年北方ニ移シ、更ニ靈舍ヲ營ム、

安樂壽院南陵 近衛天皇

紀伊郡竹田村ニアリ、東面ス、兆域周圍七十四間六分三厘、鳥羽帝ノ南二重多寶塔是ナリ、

火葬所、愛宕郡野口村大字東紫竹大門字内畑ニアリ、

法住寺法華堂 後白河天皇

下京區蓮華王院ノ東大興德院ノ内ニアリ、陵上ノ小堂ニ宸影ヲ置ク、法住寺法華堂是ナリ、域内後陽成後水尾兩帝皇子ノ墓四アリ、兆域周圍百五十二間一分、西面ス、

香隆寺陵 二條天皇

葛野郡衣笠村大字小北山字八町柳ニアリ、香隆寺三昧堂ノ遺址ナリ、兆域周圍百三十一間六分、陵標五葉松ヲ植ウ、

清閑寺陵 六條天皇

下京區清閑寺町ノ東、清閑寺ノ北、高倉帝陵ノ上ニアリ、兆域東西四十一間五分、南北二十五間七分、

清閑寺法華堂 高倉天皇

六條帝陵ト同所ニアリ、陵側ニアルモノ妃小督ノ墓ト云フ、兆域東西二十一間五分、南北二十七間、

大原法華堂 後鳥羽天皇

愛宕郡大原村大字勝林院ノ東賣炭山ノ麓ニアリ、兆域面積百九十七坪九合五勺五才、檜杉群立ス、延應元年二月帝隱岐國ニ崩ス、同國海部郡葛田山ニ火葬ス、今ノ源福寺ノ地ナリ、遺詔シテ國忌山陵ヲ置カス、北面藤原能茂遺骨ヲ收メテ京師ニ還リ、後此ニ藏ス、

金原陵 土御門天皇

乙訓郡海印寺村楊谷寺ノ山下金ケ原ニアリ、石塚ト稱ス、封土八角、高六尺、兆域面積二百五十五坪三合七勺五才、帝寛喜三年十月阿波國ニ崩ス、同國板野郡里浦ニ葬ル、天福元年十二月、母儀承明門院此地ニ法華堂ヲ經營シ、遺骨ヲ安ク、

大原陵 順德天皇

愛宕郡大原野大字勝林院後鳥羽帝陵ト同所ニアリ、帝仁治三年九月佐渡國ニ崩シ、同國雜太郡竹田村眞野山ニ火化ス、寛元元年四月、康光法師御骨ヲ奉シテ此ニ藏ム、

九條陵 仲恭天皇

紀伊郡深草村大字福稻東福寺ノ山上ニアリ、西面ス、兆域周圍百四十五間七分、

觀音寺陵 後堀河天皇

下京區今熊野町泉涌寺內來迎院ノ後山ニアリ、兆域面積二百七十八坪七合五勺

月輪陵 四條天皇

下京區今熊野町泉涌寺後山字泉山ニアリ、九重石塔ヲ置ク、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後桃園、光格、仁孝帝陵、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成帝灰塚、皇子墓二拾ヲ合セテ、兆域千六百二十六坪五合二勺タリ、

嵯峨殿法華堂 後嵯峨天皇

葛野郡嵯峨村天龍寺ニアリ、法華堂方三間、以テ陵トス、

火葬所、同郡同村龜山ノ麓ニアリ、老櫻及小杉叢生ス、龜山殿藥草院是ナリ、

深草法華堂 後深草天皇

紀伊郡深草村安樂行院內ニアリ、法華堂ノ舊址ナリ、伏見、後伏見、後光嚴、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成ノ諸陵ト相並フ、兆域面積三百四十二坪五合四勺、今ノ法華堂ハ明治元年再造ス、

火葬所、紀伊郡伏見元材木町松林院內ニアリ、面積二百九十三坪六合、

龜山殿法華堂 龜山天皇

葛野郡嵯峨村天龍寺境內淨金剛院後嵯峨帝陵ノ西ニ並フ、面積合シテ四百十坪九勺、

火葬所、後嵯峨帝ト同所ニ在リ、

分骨所、上京區南禪寺町南禪院方丈曹源池上ニアリ、兆域周圍四十二間五分、陵上小舍ヲ構フ、遺勅ニヨリ火化ノ後、御骨ヲ淨金剛院、金剛峰寺、南禪寺ニ分ツト、本陵其一ナリ、

蓮華峰寺陵

葛野郡嵯峨村大字上嵯峨大覺寺ノ東北山麓ニアリ、土人八角堂ト稱ス、龜山後二條、兩帝分骨ノ墓二ヲ併セテ、兆域面積六百九十五坪七合三勺、

深草法華堂 伏見天皇

後深草帝陵同所ニアリ、

深草法華堂 後伏見天皇

後深草帝陵同所ニアリ、

北白川陵 後二條天皇

愛宕郡白川村ノ西字追分耕田ノ中ニアリ、土俗福塚ト呼フ、百萬遍知恩寺ノ東方ニ位ス、兆域周圍九十一間、古松二株陵上ニ生ス、

分骨所、後字多帝陵ノ域内ニアリ、

十樂院上陵 花園天皇

下京區粟田町青蓮院ノ東南字上ノ坊ニアリ、兆域東西十二間三分、南北八間二分、封土高五尺餘、樹竹叢生ス、

嵯峨小倉陵 後龜山天皇

葛野郡嵯峨村大字上嵯峨愛宕道小阪福田寺ニアリ、兆域面積四百十五坪八合一勺、是ヲ北方陵トス、南陵河内國交野郡私市村獅子窟山寺ニアリ、百重原陵ト稱ス、

御髮堂 光厳天皇

葛野郡嵯峨村天龍寺金剛院ニアリ、兆域十七坪五合、山陵丹波國北桑田郡山國井戸村常照寺後山ニアリ、山國陵ト稱ス、

大光明寺陵 光明天皇

紀伊郡堀内村大字堀内字立賣指月ノ後山泰長老屋敷ト稱スル地大光明寺ノ舊址ニ在リ、兆域周圍百七十九間、

大光明寺陵 崇光天皇

紀伊郡堀内村光明帝陵ト同域内ニアリ、

深草法華堂 後光厳天皇

後深草帝陵ト同所ニアリ、

分骨所、下京區今熊野町泉山雲龍院ノ内ニアリ、後圓融納骨所、後小松灰塚墓五ヲ合セテ、面積九百坪二合、

深草法華堂 後圓融天皇

後深草帝陵同所ニアリ、

分骨所、後光嚴帝ト同所ニアリ、

深草法華堂 後小松天皇

後深草帝陵同所ニアリ、

灰塚、後光嚴帝ト同所ニアリ、

深草法華堂 稱光天皇

後深草帝陵同所ニアリ、

葬所、泉涌寺中今其所ヲ失フ、尊牌位牌殿ノ第一位ニ置クト云フ、

火葬所 後花園天皇

上京區小川頭扇町大應寺內ニアリ、文明三年正月悲田院ニ火化ス、此地其遺跡ナリ、兆域東西九間九分六厘、南北十三間四分五厘、陵上櫻樹ヲ植ウ、山陵丹波國北桑田郡井戸村ニ在リ、後山國陵ト稱ス、

深草法華堂 後土御門天皇

後深草帝陵ト同所ニアリ、又遺骨ヲ伏見般舟三昧院、山國常照寺等ニ分ツ

深草法華堂 後柏原天皇

後深草帝陵ト同所ニアリ、般舟三昧院ニ分骨ス、

深草法華堂 後奈良天皇

後深帝陵ト同所ニアリ、般舟三昧院ニ分骨ス、

深草法華堂 正親町天皇

後深草帝陵ト同所ニアリ、般舟三昧院ニ分骨ス、

深草法華堂 後陽成天皇

後深草帝陵ト同所ニアリ、般舟三昧院ニ分骨ス、

灰塚、泉涌寺ニアリ、

月輪陵 後水尾天皇

下京區今熊野町泉涌寺後山字泉山ニ在リ、九重石塔ヲ置ク、以下三陵皆同シ、

御齒髮塔、上京區相國寺法堂ノ西ニアリ、三重寶塔是ナリ、

月輪陵 明正天皇

月輪陵 後光明天皇

月輪陵 後西院天皇

月輪陵 靈元天皇

月輪陵 東山天皇

月輪陵 中御門天皇

月輪陵 櫻町天皇

月輪陵 桃園天皇

月輪陵 後櫻町天皇

月輪陵 後桃園天皇

後月輪陵 光格天皇

後月輪陵 仁孝天皇

後月輪東山陵 孝明天皇

兆域面積六百四十七坪八合九勺、

式墓 延喜式載スル所

宇治墓 菟道若郎子命

宇治郡宇治村ニアリ、延喜式ニ菟道若郎子皇子、在山城國宇治郡、兆域東西十二町、南北十二町、守戸二烟トアル是ナリ、今宇治橋ニ至ル道ノ右方川ノ東北ニアリ、

大枝陵 光仁天皇夫人高野新笠、桓武天皇母、贈太政大臣乙継女、追號皇太后、謚曰天知日之子姫尊、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國乙訓郡、兆域東一町一段、西九段、南二町、北三町、守戸五烟、遠墓タリ、今同郡大枝村ノ内老阪峠沓掛民家ノ北山ノ上ニアリ、封土高三間半、周囲七十二間、面積七百八十七坪一厘、陵上老杉アリ、俗酒頼童子ノ首塚トイフモノ是ナリ、

高畠陵 桓武天皇皇后藤原乙牟漏、平城嵯峨二帝母、内大臣良継女、追尊皇太后、謚號天之高藤宗照姫尊、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國乙訓郡、兆域東三町、西五町、南三町、北六町、守戸五烟、近陵タリ、今同郡向日町大字寺戸ノ西北、字大塚ナル丘上ニアリ、封土高一丈三尺、周囲四十四間、面積千二百九十二坪九合一勺、陵上矮松叢生ス、本陵一ニ長岡山陵ト稱ス、

宇波多陵 桓武帝妃、藤原旅子、淳和帝母、贈太政大臣百川女、追贈皇太后、

延喜諸陵式ニ曰在山城國乙訓郡、兆域東西四町、南一町、北三町、守戸五烟、遠陵タリ、今同郡大枝村大字塚原字ウバドニアリ、兆域面積三百五十坪三分五厘、

石作陵 淳和帝妃高志内親王、桓武帝女、平城帝同母妹、贈一品皇后、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國乙訓郡、兆域東西三町、南三町、北六町、守戸五烟、遠陵タリ、今同郡石作村ノ内灰方ノ西南圓尾山ニアリ、

嵯峨陵 嵯峨帝皇后橘嘉智子、仁明帝母、贈太政大臣清友女、稱檀林皇后、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國葛野郡、兆域東西六町、南二町、北五町、守戸三烟、遠陵頒幣ノ例ニ入ラス、今同郡嵯峨水尾兩村ノ境深谷ニアリ、遺令シテ薄葬山陵ヲ營マス、其形迹ヲ失フ、

後山科陵 仁明帝皇后藤原順子、文德帝母、左大臣冬嗣女、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡、假陵戸五烟、今同郡御陵村安祥寺上地山御所平ニアリ、兆域面積七百四十九坪七合、陵上古松數株アリ、

中尾陵 仁明帝妃藤原澤子、光孝帝母、贈太政大臣總継女、追尊皇后、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國島邊郷、陵戸五烟、山四町五段、四至、東限谷、南限田、西限隍、北限谷、近陵タリ、今下京區今熊野町字垣内ニアリ、封境五十六坪八分七合、

小野陵（宇多帝皇后、藤原胤子、醍醐帝母、内大臣高藤女、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡小野郷、陵戸五烟、四至、東限百姓口分幷觀修寺山、南限小乘栖寺山幷道、西限檀尾山岑、北限松尾山尾並百姓口分、近陵タリ、今同郡勸修寺村大日山ニアリ、兆域周圍二百六十三間四分、面積九十三坪三合、陵上老松一株アリ、

白河陵（文德帝皇后、藤原明子、清和帝母、太政大臣良房女、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國愛宕郡上粟田郷、南限自御在所南去十一丈、西限贈正一位源氏墓北、北限白河、遠陵タリ、今同郡田中村ノ北大后森俗訛圓子森ト呼フ地是カト云フ、

後深草陵（清和帝皇后、藤原高子、陽成帝母、贈太政大臣長良女、稱二儀后一、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國紀伊郡深草郷、守戸三烟、東限禪定寺、南限大墓、西限極樂寺、北限佐能谷、遠墓タリ、今同郡深草村眞宗院後丘僧圓空塔是カト云フ、

相樂墓（藤原百川、贈太政大臣正一位、淳和帝外祖父、宇合男、）

延喜諸陵式曰、在山城國相樂郡、兆域東西三町、南北二町、守戸一烟、遠墓タリ今同郡相樂村大字吐師ニ古墳二アリ、其田間ニアルモノヲ以テ其墓ト定メ、本年村人大ニ修營ヲ加ヘタリ、

後相樂墓（百川夫人、贈正一位、藤原氏、淳和帝外祖母、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國相樂郡贈太政大臣墓、内、無守戸、遠墓タリ、百川墓ト同所ニナルヘシ、

巨幡墓（伊豫親王、贈一品、桓武帝第四子、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡、兆域東一町、西一町、南二町五段、北三町、守丁一人、遠墓タリ、紀伊郡六地藏村ノ西字金塚塚上五輪石塔ヲ置ク、或ハ是カト云フ、

加勢山陵（橘清友、贈太政大臣正一位、仁明帝外祖父、奈良麻呂子、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國相樂郡、兆域東西四町、南北六町、守戸一烟、遠墓タリ、同郡鹿脊山村古寺池側ニ在リト云フ、今其所ヲ亡フ、

後宇治墓（藤原冬嗣、贈太政大臣正一位、文德帝外祖父、）

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡、兆域東西十四町、南北十四町、守戸二烟、遠

墓タリ、今同郡木幡村ノ東北御藏山官林中古墳アリ、蓋是カ、公深草別業ニ葬シ、同山ニ葬ル、其火化ノ所亦詳ナラス、

次宇治墓 冬嗣夫人、藤原美都子、文德帝外祖母、贈正一位、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡贈太政大臣墓內、遠墓タリ、冬嗣墓ト同所ニアリ、

愛宕墓 源潔姬、贈正一位、清和帝外祖母、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國愛宕郡、兆域東二町、南一町、西一町五段、北一町五段、守戸一烟、遠墓タリ、所在未タ詳カナラス、

大岡墓 桓武帝妃、藤原吉子、伊豫親王母、右大臣是公女、贈正二位、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國葛野郡大岡鄉、守戸一烟、遠墓タリ、本郡廣野村村南ノ一丘、誤テ文德墓トナスモノ是墓ナリ、

後愛宕墓 藤原瓦房、太政大臣贈正一位、忠仁公、清和帝外祖父、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國愛宕郡、守戸一烟、遠墓タリ、或ハ曰フ、今同郡一乘寺村染殿ト稱スル地アリ、是墓カ、一說ニ云、東山南禪寺ヨリ永觀堂ニ赴ク路ノ西ニ當リ、聽松院ノ北隣舊雲門庵ノ跡一土阜アリ、兆域凡東西二間半、南北三間、古樹惡草其上ニ生ス、中ニ斷碑アリ、太政大臣ノ文字ヲ存ス、寺僧傳ヘテ初代太政大臣ノ墓トイフ、人臣ヲ以テ此官ニ任セラルモノ、實ニ公ヲ以テ始トス、大ニ據アルニ似タリ、

深草墓 仁徳帝后、昭宣公妹、陽成帝外祖母、藤原長良女、贈正一位、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國紀伊郡、守戸一烟、遠墓タリ、今同郡深草極樂寺舊跡番神山ニアリ、

高畠陵 桓武帝第十三子、仲野親王、宇多帝外祖父、贈一品太政大臣、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國葛野郡、墓戸一烟、近墓タリ、今同郡太秦村西帷子辻垂箕山ニアリ、封土高二間、兆域東西四十五間、南北三十四間、

河島墓 當宗氏、仲野親王室、宇多帝外祖母、贈正一位、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國葛野郡、墓戸一烟、近墓タリ、今同郡德大寺村御墓ト稱スル地、或ハ俗ニ天皷ノ森ト呼フ一丘カト云フ、

八阪墓 藤原數子、贈正一位、光孝帝外祖母、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國愛宕郡八阪鄉、墓地十町、墓戸一烟、今下京區八阪法觀寺ノ前金園町西側人家ノ裏ニアリ、俗朝日塚ト稱シ、朝日將軍ノ墓トイフ、僅ニ丘形ヲ存スルノミ、

拜志墓 藤原鴻機、贈太政大臣正一位、光孝帝外祖父、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國愛宕郡鳥戸郷、墓地四町、墓戸一烟、近墓タリ、今東山清閑寺西方ノ山上老松巨石ノアル所是カト云フ、

次宇治墓　藤原基經、贈正一位太政大臣、昭宣公、朱雀村上二帝外祖父、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡、墓戸一烟、近墓タリ、今同郡木幡村ノ東北一丘俗狐塚ト稱スル地是カ、

小野墓　藤原高藤、贈太政大臣正一位、醍醐帝外祖父、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡小野郷、近墓タリ、今同郡勸修寺村ノ西鍋岡ノ頂上ニアリ、相傳ヘテ本墓トイフ、高藤ハ勸修寺ノ舊族七家ノ始祖ナリ、

後小野墓　高藤夫人宮道氏、山科大領醫益女、醍醐帝外祖母、贈正一位、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡小野郷、近墓タリ、今同郡勸修寺村巽方小野村ノ西櫻塚ト稱スルモノ是カト云フ、

又宇治墓　昭宣公嫡子、藤原時平、贈太政大臣正一位、

延喜諸陵式ニ曰、在山城國宇治郡、墓戸一烟、遠墓タリ、今同郡木幡村ノ北方字三十番神ノ竹林中ニアリ、墓上一巨石アリ、

諸墓

美福門院塔　紀伊郡竹田村ノ西白河帝陵ノ傍ニアリ、

建禮門院塔　愛宕郡大原村字草生寂光院ニアリ、柵ヲ繞ラシ石塔ヲ置ク、

葛原親王墓　乙訓郡圓明寺村ノ西北ニアリ、封土高一間、墓域東西六間、南北四間半、老松及篁竹ヲ生ス、

明日香親王墓　久世郡大久保村ノ東巨椋社ノ後ニアリ、

伊登内親王墓　乙訓郡大原野村字上羽ノ西ニアリ、五輪石塔ヲ安ス、阿保親王及業平ノ塔トイフモノ並ヒ立ツ、

廢太子恒貞親王墓　葛野郡嵯峨村大覺寺ノ傍ニアリ、相傳ヘテ親王ノ墓ト云フ、

有智子内親王墓　同村二尊院ノ東ニアリ、

惟喬親王墓　同郡小野村ニアリ、

貞純親王墓　同郡嵯峨村字水尾ニ在リ、

以仁王墓　相樂郡綺田村字鳥居ニアリ、墓上古樫三株アリ、

尊良親王墓　上京區南禪寺町下河原ニアリ、石柵ヲ繞ラシ、墓上檜一株ヲ植ウ、

尊圓親王墓　乙訓郡小鹽村善峰寺ニアリ、
尊朝法親王墓　下京區粟田青蓮院ニ在リ、
一休和尚墓　綴喜郡薪村酬恩庵ニアリ、東西六間餘、南北八間餘、石塔ヲ建ツ、
近年皇子ノ墓ニ入ル、
堯恕法親王墓　下京區妙法院附屬墓地中ニアリ、
小野毛人墓　愛宕郡修學院村大字高野ノ東北ニアリ、往年墓中ヨリ銅牌ヲ得シコトアリ、長二尺許、廣一寸許、表裏銘アリ曰ク、
飛鳥淨見原宮治天下天皇御朝任太政官兼刑部大卿位大錦上小野毛人
朝臣之墓、（時造歳次丁丑年十二月上旬即葬、）
其後之ヲ埋メ故ノ如クセリト曰フ、毛人ハ大德妹子ノ子ナリ、
橘諸兄墓　綴喜郡井手村ノ東南字ヒラキニアリ、
坂上田村麻呂墓　宇治郡醍醐村栗栖野ニアリ、墓上樹木鬱葱タリ、弘仁二年宇治郡栗栖村ノ地三町ヲ賜ヒ墓地トナストアリ、即チ此地ナリ、本年大ニ造營ヲ加ヘ、儼然タル一墳墓トナレリ、
清原夏野墓　葛野郡雙岡ノ上ニ在ル是ナリト云フ、蓋シ其雙岡山莊ノ上ニ當レリ、

小野篁墓　大宮頭雲林院ノ東ノ野ニアリ、近年碑ヲ立テ之ヲ表セリ、
藤原定方墓　宇治郡醍醐村字勸修寺ノ山ニアリ、
藤原忠平同實賴同兼實同道家墓　紀伊郡深草村東福寺境內ニアリ、
藤原道長同賴通同道隆墓　宇治郡木幡村淨妙寺舊址中ニアリ、此他藤原氏出ノ后妃ノ陵墓多シ、古墳累々、就レヲ是ト定メ難シ、
藤原通憲墓　綴喜郡立川村大字大道寺小字宮ノ前ニアリ、石塔一基ヲ建ツ、土俗信西墳ト傳フ、
藤原良經墓　下京區五條橋東六町目鳥部山實報寺ニアリ、
藤原良基墓　葛野郡嵯峨村二尊院ノ北二條家ノ墓地ニアリ、
藤原兼平墓　葛野郡梅ヶ畑村高山寺ノ下ニ在リ、
三條西實隆墓（道盛院內大臣）　同村二尊院開山塔ノ側ニアリ、小五輪塔ヲ建ツ、同公條同實枝ノ墓同所ニアリ、
藤原信尋墓　愛宕郡大宮村大德寺中ニアリ、此外歷世ノ塔亦此ニ在リ、
藤原尙實墓　紀伊郡東福寺中ニアリ、
藤原公純墓　上京區寺町今出川上十念寺ニアリ、
藤原光世墓（裏松固禪入道）　上京區報恩院ニアリ、

藤原愛親墓 中山大納言　上京區寺町廬山寺ニアリ、

藤原實萬墓 三條忠成公　同院三條家墓域中ニアリ、南面三重ノ大石塔ヲ建ツ、

藤原實美瘞髮冢 三條正一位大勳位內大臣　忠成公墓ノ東ニ在リ、其製相同シ、

源經基墓　下京區八條町六孫王社後林叢中ニアル石室是ナリ、

源爲義墓　葛野郡朱雀村人家ノ裏ニアリ、

源賴政墓　久世郡宇治町最勝院內ニアリ、近世大河內信古修繕ヲ加ヘ五輪石塔ヲ建ツ、

平敦盛影塔及熊谷直實髮塔　共ニ上京區岡崎町金戒光明寺勢至堂ノ前ニアリ、五輪塔ヲ建ツ、高六尺許、

平重衡墓　宇治郡醍醐村字外山街道佛心寺路ニアリ、墓址纔ニ存ス、

馬町古墓　下京區馬町五町目常盤町ニアリ、五層石塔二基相並フ、俗佐藤繼信忠信墓ト云フ、眞否詳ナラス、

新田義貞首塚　葛野郡嵯峨村舊往生院ノ中ニアリ、

楠正行首塚　同村舊寶筐院地內ニアリテ、足利義詮墓ト相並フ、以上二冢猶考定ヲ待ツモノトス、

足利尊氏墓　同郡衣笠村等持院ニアリ、寶篋印塔ヲ建ツ、高六尺餘、南面ス、

足利義詮墓　同郡嵯峨村舊寶筐院地內ニアリ、

赤松則村墓　下京區建仁寺內ニアリ、寶篋印塔ヲ建ツ、

細川賴之墓　葛野郡下山田村地藏院ニアリ、墓上怪石ヲ置ク、

山名宗全墓　上京區南禪寺中眞乘院ニアリ、石臺ノ上一ノ圓石ヲ置ク、

細川勝元墓　葛野郡花園村字谷口龍安寺ノ後山ニアリ、寶篋印塔ヲ建ツ

足利義政墓　上京區相國寺中慈照院ニアリ、延德中改葬スル所ナリ、

織田信長同信忠墓　同區寺町通今出川ノ北鶴山町阿彌陀寺墓域東北ニ在リ、西面ニ二塔ヲ列ス、外ニ殉難戰死者ノ墓數十基アリ、

又愛宕郡大德寺舊總見院ニ在リ、豐太閤ノ建ツル所ナリ、

竹中重治墓　愛宕郡田中村知恩寺ニアリ、

齊藤利三首冢　上京區淨土寺町眞正極樂寺墓域ニアリ、

豐臣秀長墓　愛宕郡大宮村大德寺中大光院ニアリ、

豐臣秀次首塚幷ニ夫人婢妾三十餘人墓　下京區木屋町三條下ル瑞泉寺ニアリ、六角石塔子女五人ヲ合葬ス、殉死拾士ノ墓南側ニ立ヲ、妻妾三十四人

ノ墓北側ニ立ツ、世ニ畜生塚ト日フ、此地秀次自刃ノ後、妻子ヲ斬リシ所ニシテ、秀次ノ首ヲ併セ一坎ニ瘞ム、慶長十六年角倉了意僧桂寂ト謀リ、墓標ヲ起スト云、

金吾秀秋墓　同區本國寺中ニアリ、

蒲生氏郷墓　愛宕郡大宮村大德寺中昌林院墓地ノ西南隅ニアリ、昌林院ハ氏郷ノ法號ニシテ、寺ハ氏郷ノ爲ニ建テシ所ナレト今廢ス、

酒井忠次塔　下京區知恩院ノ山腹勢至堂ノ背後ニアリ、

豐臣秀吉墓　同區阿彌陀峰頂ニアリ、豐臣氏天下ノ力ヲ盡シテ之ヲ營ミ、宏壯偉麗ヲ極メシカ、德川氏之ヲ夷滅シ、廢絕スルコト三百年、近年中興ノ企アリテ、未タ果サス、又石塔ハ大佛方廣寺ノ東南ニアリ、五輪石塔ヲ建ツ、封域東西十間半、南北六間、石柵ヲ繞ラス、德川氏其墓ヲ夷ラクルニ及ヒ、別ニ營スル所ナリ、

鳥居元忠墓　愛宕郡田中村知恩寺ニアリ、

前田玄以墓　上京區元三十三組正往寺町專念寺ニアリ、五輪石塔高四尺餘、碑面德善院殿ノ四字ヲ鐫ス、

細川幽齋夫妻墓　同區南禪寺町南禪寺中天授庵墓地ノ山涯ニ別ニ墓域ヲ占メ、小堂ヲ建テ、小五輪塔ヲ置キ前ニ拜所ヲ設ク、

堀尾吉晴墓　葛野郡花園村妙心寺中春光院ニアリ、夫妻相並フ、出雲國松江ヨリ移ス所ナリ、

眞田幸村夫妻墓　同郡龍安寺中大珠院ノ南池中小島上ニアリ、蓋影塔ナリ、

長曾我部盛親首塚　下京區國栗圖子人家ノ側ニアリ、盛親ヲ此ニテ斬リ、其首ヲ埋メシ所ナリト云フ、

織田長益墓　下京區靑柳小路建仁寺舊塔頭正傳院ニアリ、又茶人武田紹鷗塔之レト相對ス、

片桐且元墓　愛宕郡大德寺中玉林院ニアリ、

細川忠興齒塔　仝寺高桐院ニアリ、

黑田如水墓　仝寺龍光院ニアリ、

小早川隆景髮塔　仝寺黃梅院ニアリ、

水野勝成墓　仝寺中瑞源院址ニ在リ、

福嶋正則墓　葛野郡妙心寺中海福院ニアリ、

脇坂安治及安元墓　葛野郡妙心寺中隣華院墓地ニアリ、林道春撰文ノ碑石ヲ建ツ、

加藤嘉明夫妻墓　上京區元三十三組正往寺町專念寺ニアリ、五輪石塔二基相並フ、

木下勝俊墓　下京區高臺寺ニアリ、龜趺圭石、高七尺許、

山内一豐墓　葛野郡妙心寺中舊大通院ニアリ、

僧遍昭墓　宇治郡山科村大字花山字中道ニアリ、墓上岩石一個老櫻一株アリ、

僧西行平康頼僧頓阿墓　下京區鷲尾町雙林寺本堂ノ傍ニアリ、蓋シ影塔ナルヘシ、

藤原俊成墓　紀伊郡東福寺中南明院ニアリ、

藤原家隆墓　上京區千本通上立賣上ル花車町石像寺ニアリ、五輪塔ヲ置ク、定家及寂蓮ノ塔ト云モノ相並フ、

藤原定家墓　同區相國寺中普光院ニアリ、冷泉家認メテ眞墓トス、葛野郡嵯峨村厭離庵時雨紅葉ト稱スル楓樹下ニモ定家墓ト稱スルモノアリ、

佐川田昌俊墓　綴喜郡薪村甘南備山下默々寺ニアリ、石塔一基ヲ立ツ、

松永貞德墓　紀伊郡上鳥羽村實相寺佛堂ノ南ニアリ、石標ヲ建ツ、

富士谷成章墓　愛宕郡蓮臺寺中大慈院ニアリ、其子御杖墓モ同所ニアリ、

賀茂保考墓　愛宕郡西賀茂村字小谷墓地ニアリ

鴨祐之墓　同郡下賀茂村墓地ニ在リ、

小澤蘆菴墓　同郡白川村心性寺ニアリ、

上田餘齋墓　上京區南禪寺町西福寺堂前ニアリ、蟹形趺石ノ上ニ墓碑ヲ建ツ、

賀茂季鷹墓　愛宕郡上賀茂村ニ在リ、

香川景樹墓　同區二條川東聞名寺墓域内ニアリ、黄中及ヒ一家ノ墓アリ、

角倉了以及素庵墓　葛野郡嵯峨村二尊院ニアリ、

藤原惺窩墓　上京區相國寺中林光院ニアリ、墓上古榊一株アリシカ、近時有志者大ニ修繕ヲ加ヘ、石碑ヲ建ツ、

朝山意林庵墓　下京區下寺町長講堂ニ在リ、

伊藤仁齋同東涯墓　葛野郡嵯峨村二尊院ニアリ、側ニ一家歷世ノ墓アリ、

山崎闇齋墓　上京區岡崎町金戒光明寺文珠堂ノ北ニアリ、東向ス、此他中江藤之丞、藤村庸軒、三宅尚齋、北村篤所ノ墓、鳥井元忠等ノ墓碑アリ、

堀杏庵墓　同區南禪寺中歸雲院ニアリ、南湖景山共ニ同域内ニ在リ、

石川丈山墓　愛宕郡修學院村ノ東南字松原ニアリ、墓域方三間、碑石ヲ建ツ、

江村專齋墓　上京區岡崎町善正寺ニアリ、
淺見綱齋墓　同區烏部山墓所ニアリ、
並河天民墓　同區清閑寺町清閑寺墓域ニアリ、
荷田東麻呂墓　紀伊郡稻荷神社南二町許阿里山墓地ニアリ、
三輪執齋墓　下京區建仁寺內ニアリ、老杉二株墓背ニ立ツ、
石田梅巖墓　同區烏部山墓地ニアリ、手島堵庵、柴田鳩翁ノ墓モ亦同所ニアリ、
稻生若水墓　上京區淨土寺町通稱寺ニアリ、
藤原貞幹墓　上京區淨土寺町眞如堂ノ西北ニアリ、
皆川淇園墓　上京區鶴山町阿彌陀寺ニアリ、
賴山陽墓　下京區長樂寺ノ山腹西面ニ在リ、
此他三樹、牧慈齋、藤井竹外、武元登々庵、長澤蘆雪、浦上春琴等ノ墓或ハ碑アリ、
猪飼敬所墓　上京區淨土寺町眞正極樂寺ニアリ、
貫名海屋墓　下京區高臺寺ニアリ、
梁川星巖及妻紅蘭墓　上京區南禪寺中天授庵ニアリ、二基相並フ、

梅田定明髮塔　下京區元廿一組白糸町安祥院內ニアリ、
佐久間象山墓　葛野郡妙心寺中大法院墓地ニアリ、
飯田忠彥墓　上京區河原町二條上ル清水町高田坊龍源寺ニアリ、
横井時存墓　同區南禪寺中天授庵ニアリ、
木戸孝允墓　下京區靈山ニアリ、
玉松操墓　同所ニアリ、
兆殿司墓　紀伊郡東福寺中南明院ニアリ、
土佐氏歷世墓　愛宕郡田中村知恩寺ニ在リ、
海北友松墓　上京區淨土寺町眞如堂ニアリ、
狩野元信墓　同區寺之內新町西妙覺寺中ニアリ、一家ノ墓亦此ニアリ、
尾形光琳墓　同區寺之內新町西入妙顯寺內ニアリ、
池野大雅墓　同區寺之內千本東入新猪熊町淨光寺墓地ニアリ、
圓山應擧墓　下京區四條通大宮西入悟眞寺ニアリ、
伊藤若冲墓　上京區相國寺方丈ノ北舊慈光院ノ墓地ニアリ、又一所深草石峰寺ニアリ、
松村吳春及景文墓　愛墓郡修學院村金福寺ニアリ、近時八條大通寺ノ墓地

ヨリ此ニ改葬ス、

岸駒墓　上京區寺町通今出川上ル本滿寺ニアリ、

浮田可爲墓　同區六軒町通下長者町下ル七番町華光寺墓地ニアリ、

佛師定朝墓　愛宕郡蓮臺寺中廢照明院墓地西隅ノ別域ニアリ、

珠光墓　同郡大德寺中眞珠庵ニアリ、墓上唯一青石ヲ置クノミ、

後藤祐乘墓　同郡蓮臺寺中舊普明院ニアリ、南面ス、後藤氏累代ノ墓域タリ、

千利休墓　同郡大德寺中聚光院墓域中東面ニ石塔ヲ建ツ、頗ル奇古ナリ、

里村紹巴墓　同正受院墓域ノ中ニアリ、五輪塔ヲ建ツ、

古田織部墓　同三玄院墓域中ニアリ、

小堀政一墓　同孤蓬庵東南位ニアリ、大五輪塔ヲ立ツ、寺ニ松永尺五譔碑文ノ稿ヲ藏セリ、

金森長近墓　同金龍院北方ニアリ、

本阿彌光悅墓　愛宕郡鷹ヶ峰光悅寺ニアリ、

僧守敏墓　葛野郡七條村字唐橋ニアリ、俗シユビン冢ト云フ、

僧裔然墓　葛野郡嵯峨村清涼寺ノ北田圃中ニアリ、

僧解脫墓　相樂郡笠置村笠置山ニアリ、

僧法然墓　下京區知恩院山上ニアリ、南面墓廟ヲ建ツ、

僧榮西墓　同區建仁寺開山堂ニアリ、石室アリ、寺說生身入定ノ所ト云フ、

僧明惠墓　葛野郡梅ヶ畑村高山寺後山ニアリ、

僧文覺墓　同村神護寺後山ニアリ、

蓮生房墓　乙訓郡乙訓村字粟生光明寺ニアリ、

僧慈鎭墓　同郡善峰寺ニアリ、

僧親鸞墓　下京區東山大谷ニアリ、初メ知恩院ニ在リ、後此ニ徙ス、

僧辨圓墓　紀伊郡深草村東福寺ニアリ、

僧無關墓　上京區南禪寺中天授菴ニアリ、

僧一山墓　同寺中南禪院ニアリ、

僧妙超墓　愛宕郡大宮村大德寺ニアリ、

僧夢窓墓　葛野郡嵯峨村臨川寺三會院ニアリ、

僧妙葩墓　同村鹿王院ニアリ、

僧關山墓　同郡花園村妙心寺中玉鳳院ニアリ、

僧蓮如墓　宇治郡山科村本願寺別院ニアリ、

僧惠瓊首墓　下京區建仁寺方丈ノ東北林中ニアリ、

僧元政墓　紀伊郡深草村瑞光寺ニアリ、
僧隱元墓　宇治郡宇治村萬福寺ニアリ、
僧忍向及信海墓　下京區清水寺境內ニアリ、
白幽子墓　上京區元眞如堂ノ北舊墓地字芝墓ニアリ、高一尺四寸廣八寸强、圭形ノ石ヲ立ツ、
紫式部墓　愛宕郡大宮村雲林院ノ東ノ畑中ニアリ、小野篁墓ト相隣ル、
和泉式部墓　下京區新京極中筋町誠心院ニアリ、
源渡妻袈裟墓　紀伊郡上鳥羽村ニアリ、林羅山撰文ノ碑アリ、下鳥羽亦鯉家アリ、孰レカ是ナルヲ知ラス、
祇王祇女佛尼墓　葛野郡嵯峨村舊往生院ニアリ、
小督墓　下京區清閑寺町清閑寺ニアリ、
阿佛尼墓　同區八條町六孫王社西北ニアリ、寶篋印塔ヲ建ツ、
豐臣大政所墓　愛宕郡大德寺舊天瑞寺ニアリ、寶篋印塔ヲ建ツ、豐太閤其母堂ノ爲メ逆修塔ヲ立テ、薨後此ニ葬リ、香華寺ヲ營シ、天瑞寺ト號ス、寺廢レ墓存セリ、
高臺院淺野氏墓　同區高臺寺ノ後山ニ立ツ、靈舍開山堂ノ東ニアリ、

池大雅室玉瀾墓　上京區岡崎町黑谷ニアリ、梶女百合女ノ墓モ此ニアリ、
蓮月尼墓　愛宕郡西賀茂村ニアリ、
近衞家老女村岡墓　葛野郡嵯峨村大覺寺ニアリ、

附錄

將軍塚　粟田山ノ頂上ニアリ、古木鬱生、隆然トシテ高シ、傳云、桓武帝平安奠都ノ時、戎裝ノ偶像ヲ埋メテ、京師ノ鎭護トス、故ニ國家事變アラシトスルヤ、必ス鳴動スト、蓋シ小栗栖ノ田村將軍墓ト相混シテ此說ヲ作スニ似タリ、
耳塚　下京區大和大路方廣寺前ニアリ、塚上五輪石塔ヲ置ク、文祿年中豐臣秀吉征韓ノ役獲ル所首級ノ耳鼻ヲ鍛取リ、輸致シテ此ニ埋メ、以テ京觀トセシ所ナリ、

平安通志卷之三十八

平安通志卷之三十九

湯本文彦等編

第二編

物産志

京都ハ千年ノ舊京、億兆ノ輻湊スル所、故ヲ以テ諸品ノ需用甚タ多ク、其供給亦隨テ盛ナリ、平安ノ初メ、南都ノ富華ヲ受ケ、工藝製作亦大ニ發達シ、延喜ノ式ヲ定ムルニ及ヒ、其物産亦稍徵スヘシ、太平年久シク、人口繁庶、上下競フテ華美ヲ好ミ、隨テ物産モ益隆盛ナリ、然レトモ今其詳ヲ知ルニ由ナシ、保元以後、亂離相繼キ、王室甚タ衰ヘ幕府亦振ハス、京師荒殘、百工離散、物産從テ衰ヘタリ、慶長以來、京都完聚、更ニ繁庶ニ復ス、抑平安ノ地タル、山川佳麗、地靜ニ境幽、其人節儉、手藝ニ長シ巧思ニ富ム、幕府此ニ見ルアリ、大ニ工業保護ノ政策ヲ執リ、以テ販路ヲ開通シ、職工ヲ奬勵ス、是ニ於テ物産大ニ興リ、織物、染物、絲物、刺繡等ノ如キ、其美天下ノ最トナリテ、海内ニ衣被スルノ勢アリ、以テ近年ニ至レリ、維新ノ際、世變ニ從ヒ稍變更アリト雖トモ、其間廢アレハ必ス興アリ、替アレハ則チ隆アリ、加フルニ官府ノ勸奬市民ノ奮勵ニヨリ、年々其度ヲ進メタリ、或ハ博覽會ヲ開ヲキ、或ハ共進會ヲ設ケ、相共ニ講究スル所アリ、競爭進取以テ大ニ其實效ヲ奏

シタリ、今美術工藝ニ属スルモノハ、各〻之ヲ其編ニ述フルヲ以テ、爰ニハ一般物産ノ概略ヲ記シ、附スルニ其年々産額ヲ以テス、品額ノ夥キ未タ精査ニ逮アラスト雖トモ、亦以テ京都物産ノ大略ヲ知ルヘキナリ、

西陣織物

京都織物ノ始メハ、延暦建都ノ時ヨリ起レリ、此時織部司ヲ置キ、機織ノ事ヲ掌ラシム、蓋シ供御ノ品ヲ主トセシナルヘシ、爾來數百年、其業大ニ進ミ、延喜ノ際ニ及ヒテハ、其制益〻備レリ、承久以來大ニ衰頽シ、應仁亂後、京都荒殘、職工其居ニ安スルアタハス、洛北白雲村ニ於テ、絹布ヲ織ルノミナリシト云フ、天正ノ初メ、之ヲ新在家村ニ移シ、大ニ奬勵スル所アリ、是ニ於テ稍〻其衰運ヲ挽回シ、漸次繁殖シ、多クハ西陣ノ地、（西陣ノ沿革ハ美術工藝ノ部ニ出スヲ以テ之ヲ省ス）ニ移リ、機舍ヲ設ケテ、諸種ノ織物ヲ製スルニ至レリ、西陣ハ應仁ノ亂、山名方ノ陣所ニシテ、其兵燹後、荒原トナリシヲ以テ、新ニ此ニ機業者ノ聚落ヲ爲シタルナルヘシ、是レ今日西陣織物ノ一大物産トナリシ原因ナリ、當時製スル所ノモノハ、羽二重、精好、綾、金襴、緞子、繻子、等ノ類ニ過キサリシカ、慶長以降ハ各種ノ織物大ニ進歩シ、終ニ京都第一位ヲ占ムル物産トナレリ、其重ナル製品ヲ種別ハ金襴、雲襴、綾地、緞子、錦、綴錦、大和錦、漢唐緞子、厚板、遠州緞子、郡中、風津、高麗、廣金、半金、地金、糸錦、繻珍、蓬萊、畝織、蝦夷緞子、紋ハンカチーフ、リボン、畫絹、紈、一樂、繻子、綿緯繻子、南京繻子、御召縮緬、縞縮緬、平御召、廣貴、明石、上布、壁上布、綿逼縮緬、鳴川、都花、平上布、堅絞、博多、琥珀、羽二重、紋博多、小柳、天鵞絨、紋天鵞絨、綸天鵞絨、木綿、小倉、綿壁、上下地、綿縮、綿ハンカチーフ、綿フランネル、綿麻、眞田、綿繻珍、絹ネル、絓、綿博多ノ類ナリ、其製造所ハ時勢ニ伴ヒ增減アレトモ、近年ハ甚タ盛況ヲ極メ、其最近ノ統計ヲ擧クレハ、製造戸數ハ三千九百餘ニシテ、一箇年ノ製造金額、壹千零二三十万圓ニ上リ、之ヲ細別スレハ左ノ如シ、

紋織	三、四三七、七九二圓
生紋羽二重織	一、一一八、二五九圓
繻子織	一、二〇七、二九六圓
縮緬織	一、二一六、九七一圓
博多織	九七〇、五七八圓
天鵞絨織	三九二、二三二圓
木綿織	二、四七二、四九四圓

染物

京都ハ水質善良ニシテ、最モ染色ニ適スルヲ以テ、古來其業盛ンニ行ハレタリ、サレトモ舊記ノ傳ハヲサルカ爲ニ、其沿革ヲ詳カニスルコト能ハス、南都以前ニアリテ、已ニ纈纈、纈纈、蠟纈等ノ染工輩出シ、鳥獸草花等ノ物象ヲ染出シ、或ハ許多ノ彩色ヲ加ヘ、甚タ華麗ナルモノアリ、又官服ハ其色ヲ以テ等差ヲ定メタルコト、衣服令ニ明カナリ、大寶ノ制ニ、調ノ副物トシテ、紫、紅、茜、黃蘗、櫟、等ノ染草ヲ輸サシメタルコトアリ、此業ノ延曆以前已ニ發達セシヲ見ルヘシ延喜式ノ載スル所ノ染色ハ、黃櫨、黃丹、深紫、中紫、淺紫、深滅紫、中滅紫、深緋、淺緋、深蘇芳、中蘇芳、淺蘇芳、深蒲萄、蒲萄、淺蒲萄、韓紅花、中紅花、淺紅花、退紅、深支子、黃支子、櫟、白櫟、赤白櫟、黃櫟、淺縹、白縹、縹、深綠、中綠、淺綠、青綠、青淺綠、深縹、中縹、次縹、深藍、中藍、淺藍、白藍、深黃、淺黃、朽葉、赤紫、紫弁、汁染、深退紅、淺杉染、深鈍、紫淺、鈍紫、鈍縹、胡桃染、赤練、紺、皂、躑躅、青褐、櫟白、櫟黑、桑黃、蘗、摺、柴摺、黃色、等ナリ其染法載テ式文ニアリ彈正式ヲ定メ、深紅、深紫ノ色ハ、濫ニ着用スルコトヲ禁ス、之ヲ禁色ト云フ、其後風俗益ト華美ニ移リ、殊ニ婦人ノ衣服ノ如キハ、貴重ノ織物ヲ着スルニ至リタルヲ以テ、染工ノ如キモ大ニ工夫ヲ加ヘ、新ニ染色ヲ發明スルモノアリ、或ハ支那樣ノ染色ニ倣フモノアリ、此等種々ノ染色ヲ重ネテ、間色ヲ出スヲ最モ風流トセリ、所謂重ヲ色目是ナリ、即チ春夏秋冬ノ季節ヲ設ケテ、春ハ梅、櫻、山吹、夏ハ卯花、杜若等ノ稱ヲ付シ、其數尤モ多ク、人皆爭フテ其美ヲ競ヒ、或ハ之ヲ車ノ出衣ニ用ヰ、其垂レノ多キヲ以テ風流トナセル狀ハ、枕草紙、源氏物語等ニ明カナリ、其後世亂ニ伴ヒ、一時衰頽セシカ、元和以來更ニ興隆セリ、明治維新後二條加茂川ノ西ニ、舍密局ヲ設ケテ化學ヲ授ケ、又染殿ヲ設ケテ之ヲ應用シ、終ニ染工講習所ヲ設ケテ、生徒ヲ養成セリ、且ツ化學製品ニ屬スル染料ノ海外ヨリ輸入スルヲ以テ、染色ノ法モ亦漸ク一變シ、種々ノ間色世ニ行ハレ、其技術ノ進歩シ、艶麗人目ヲ奪フモノアルニ至レリ、而シテ其業逐年旺盛ヲ極メ、近時主ナル茶染、藍染、絲絹諸色染、紅染、絲絹藍紺染、中形紺染、紺染、紫染、引染、等ノ染價ハ、一ヶ年大凡壹百萬圓以上ニ達セリ、

友禪染

五彩各種ノ染料ヲ以テ、華紋等ヲ染出シタルモノニシテ、其法ハ蓋シ古代蔦纈ヨリ轉化セシモノナルヘシ、是レ京都特有ノ染物ナルヲ以テ、世人ノ稱賛ヲ博スルコト久シ、今日ニ傳ハル所ノ所謂友禪染ナルモノハ、京都ノ畫工宮崎友禪ナルモノヽ發明ニ係リ、畫圖紋樣各種ノ顏料ヲ施シ、之ヲ染メ水ニ投シテ洗フモ、褪色スルコトナシ、後染法漸次進歩シ、最モ鮮麗ヲ極メ、近來ハ尋常絹布ニ止

マラス、之ヲ天鵞絨地ニ應用スルノ法ヲ發明シ、大ニ歐米人ノ嗜好ニ適シ、之ヲ室內ノ裝飾トナスヲ以テ、海外ニ輸出スルモノ少カラス、堀川新三郎ナルモノ西洋舶載品「メレンス」染ノ法ヲ摸擬シ「モスリン」地ニ友禪染ヲ施スコトヲ發明シ、其業甚タ盛ニシテ之カ爲メ其海外輸入ヲ防クニ至ル、所謂鴨川友禪染是ナリ、一ケ年ノ染賃ハ、凡ソ拾二三万圓以上ニ達スルニ至レリ、

糸組物

推古ノ朝、冠服ノ制定マルヤ、其附屬ニ平緒ナルモノアリ、之ヲ韓組、或ハ高麗打、木工打トモ稱ス、奈良ノ朝ニ及ヒ、漸ク盛ンニ、平安ノ朝ニ至テハ、益〻之カ需用ヲ增シ、宮廷ニ絲所ヲ置カレ、每年五月献スル所ノ藥玉ノ絲ヲ作リ、又眞言院後七日修法ノ式ニ用ヰル五色ノ糸ヲ製スルニ至ル、當時又縫殿寮、織部司等ノ設アリシヲ以テ、其原料タル糸物ノ盛ニナリシコト知ルヘシ、保元以降甲冑ノ裝飾美麗ヲ極メ、組物モ亦タ大ニ進歩シ、種々ノ絲ヲ以ヲ甲冑ヲ綴リ、各種ノ紋樣ヲ組織シ、之ヲ何々縅シト云フニ至ル、爾來世ノ變遷盛衰ニ隨ヒ興廢アリ、應仁ノ亂、工人四方ニ離散セシカ、慶長年間ヨリ漸次舊ニ復シ、需用增加シ、冠服ノ附屬タル平緒、掛緒、露紐、法衣ノ附屬品及ヒ華鬘ノ類、武家諸侯鹵簿ノ具ニ用ヰル紐類、馬具、押掛厚總等、最モ華美ヲ競フ、又公卿ニハ糸毛車ノ制アリ、巨金ヲ擲チテ之ヲ作ル、是ニ於テ糸物ノ產出最モ盛ナリ、維新以後、一時需用ヲ減セシト雖モ、京都ノ特有物產トシテ今日ニ至レリ、其ノ販路ノ最モ多キモノハ、裁縫ニ用ヰル絹糸、織物ニ用ヰル縞絲、刺繡ニ用ヰル坪糸等ノ類ナリ、又組物ハ芥子糸ヲ以テ之ヲ作ル、組物、打物ノ種類最モ多シ、羽織紐、婦人帶締、及ヒ裝飾ニ供スル總類ノ需用多シトス、琴絃ハ古代ヨリアリ、三味線糸ハ天正年間泉州左海ノ盲人某始テ之ヲ製ス、京師ニ產スルモノヲ以テ最モ上品トス、其原料ノ蠶糸ハ、江州西山大音鍛冶屋ノ產ヲ以テ上トシ、之ニ次クモノハ、奥州三春糸トス、其製造現今ニ至テ殊ニ盛ナリ、裁縫用及三絃ノ絲ハ必シモ組物ニ屬セサレト、京都ノ同業ノ盛衰ハ、組物ト相伴フモノナレハ、併セテ之ヲ載セタリ、

以上記スルカ如ク、本業ノ發達セシニ伴ヒ、天保六年ニ絲仲間ナルモノヲ組織シ、又江戸組屋ナルモノアリ、專ラ江戸ニ向ッテ、刀劍ノ柄卷、下ケ緒等ヲ販賣ス、維新ニ及ヒ、仲間瓦解シ、明治十六年ニ至テ、更ニ糸商組合ヲ組織シ、仝廿六年ニ京都糸物工商業組合ヲ設ケ、爾來復タ盛況ニ赴ケリ、其組合人員ハ、二百九十餘名ニシテ、一ケ年ノ製造額ハ、五十七万圓以上ニ達セリ、

金銀糸

其製造方二種アリ、紙ニ金銀箔ヲ貼シ、之ヲ裁斷シテ原糸ニ卷付クルヲ縷金ト云フ、裁斷セシマヽ用フルヲ平金ト稱ス、多クハ織物刺繍ノ原料ニ供ス、而シテ其製造ノ始メ詳ナラス、平安ノ朝ニ縫殿寮及ヒ織部司等ノ設アリ、當時其需用ノ多カリシコト知ルヘシ、慶長以降ニ至テハ殊ニ盛ニ、爾來京都ノ一物産トナリ、近年海外ニ輸出スルニ至リ、從テ製造家ヲ增加シ、四十余戸ニシテ、一ケ年ノ製造額、拾四万圓以上ニ達セリ、

綵纈

綵纈（世ニ鹿子絞リト云フ）京都ノ特有物産ナレトモ、其製造ノ沿革ハ、舊記ノ徵スヘキナシ、推古ノ朝已ニ纈纈等アリ、蓋シ之ヲ始メトスヘシ、往古ハ鎧、直垂、官服等ニ用ヰ、漸次技術ノ巧ヲ加ヘ、正暦以來鎌倉時代ニ至リテハ、盛ンニ女官ノ服ニ用ヰタリト云フ、綵纈ノ法ハ中絶シテ今知ルヘカラサレトモ、鹿子絞リノ最モ舊キモノハ比豆多トス、比豆多トハ絞リテ之ヲ染メ、更ニ解キ伸シテ平絹トナシタルモノニシテ、中古以來大ニ用ヰシモノナリ、天正元祿年間ニ至リテ其製法精密ニナリ、貴賤一般ニ之ヲ需用シ、京鹿ノ子ノ名ヲ博スルニ至レリ、近世ハ衣服ニ用フルコト大ニ減少セシト雖トモ、全國一般婦女ノ頭飾襟地等トナリ、盛ンニ世ニ行ハレ、隨テ技術モ大ニ進歩シ、最モ精巧ヲ極メリ、今其盛ンニ製スル種類ヲ擧クレハ、麻ノ葉、京極刺子、摸樣鹿子、貝絞、三浦比豆多等ノ類ニシテ、其染色ハ時好ニ投スルヲ以テ一定セス、産額ハ四五十萬圓ニ達セリ、

陶器

清水燒　清水ハ京都東山ノ地名ナリ、天正年間以降、此地及ヒ五條坂ニ於テ、窯ヲ開クモノ增殖シ、遂ニ陶器産地ノ名稱トナレリ、古代ノ製品ハ、土柔ニシテ釉藥モ亦タ薄シ、鉢、茶碗、土瓶、行平等、日用ノ雜器、其ノ他小兒玩物ノ類ナリシカ、漸次進歩シ、元祿明和ノ頃ヨリ文化文政ニ至ル間、名工輩出シ、五條阪ニ於テハ、青花磁及ヒ外國古來ノ名器ヲ摸スルコト、甚タ精巧ヲ極メ、且ツ一種ノ雅味アルヲ以テ、世人ニ稱賛セラレ、大ニ其名聲ヲ發揚シ、殊ニ近來ハ海外輸出ノ路開ケ、最モ盛況ヲ致セリ、其製品ハ花瓶、香爐、火鉢、皿、鉢、置物、及各種飲食器等ノ類ヲ多シトス、現今製造家ハ六十二戸ニシテ、一箇年ノ製造産額ハ、二十餘万圓ニ達セリ、詳細ハ美術工藝陶器ノ部ニ出ツ、

粟田燒

粟田ハ京都ノ地名ナリ、元和ノ初メ、此地ノ陶器師九郎右衛門ト云フ者アリ、專ラ外國風ノ器ヲ燒ク、是ヲ粟田燒ノ始メトス、土柔ニシテ白ク、土質微黃ニシテ雞子黃色ヲ帶ヒ釉藥ニ微細ノ氷紋アリ、黑及ヒ五采ノ花卉ヲ畫キ、自カラ一種

ノ風ヲ成シ、延寶以降、名工輩出シ、近世ニ至リテハ製造ヲ改良シ、彩畫ノ術益進ミ、其製外人ノ嗜好ニ適シ、歐米人ノ好評ヲ博シ、今ヤ專ラ海外輸出品ノミヲ產シ、一大物產トナリ、製造家十一戸、產額拾万圓以上ニ達スルニ至レリ、詳細ハ美術工藝志ノ部ニ出ツ、

漆器

京都ニ於ケル漆器ノ法ハ、古代ヨリ傳ハリ、一種優美ナルヲ以テ、世人ニ稱賛セラル、而シテ其產スル器物ハ種々アリテ、一々之カ名稱ヲ擧クルコト能ハスト雖モ其多ク製スルモノハ、文房具、粧奩具、茶具、飲食器等ノ類ニシテ、其塗色モ又一定セス、殊ニ蒔繪、梨子地、螺鈿等ヲ施シタルモノヲ作ルニ長スルヲ以テ、故ニ京蒔繪ノ名聲甚高シ、又近來ハ海外輸出ノ路開ケ、製品モ一變スルモノアリ、卓、棚、椅子、寐臺、洋燈臺、捲烟草入、手匣、書架等、漆器多シ、今漆器製造家ノ統計ヲ擧クレハ、二百餘戸ニシテ、一ケ年ノ製造金額ハ凡拾五六万圓ニ達セリ、

銅器及金屬器類

銅及ヒ貴金屬細工ハ其初メヲ詳ニセサレトモ、蓋シ平安京以前ヨリ種々ノ器ヲ製シ、人物、鳥獸、花卉、堂塔、諸般ノ形狀ヲ造リ、或ハ雕、或ハ鑄、或ハ打出、或ハ揚鏤、或ハ金銀鎏鑲嵌等ノ細工トシ、又銅ヲ製シテ、宣德、白銅、紫銅、黑紫銅、鼈甲色、緋色、黃銅、褐銅、響銅、金銀鎏トナス、其器ノ種類ヲ擧クレハ、香爐、置物、花瓶、茶瓶、茶盌、火爐、水鉢、砂鉢、手爐、瓶掛、爐、藥鑵、鍋、釜、盃洗、菓盒、油入壺、盥、燭臺、手燭、燈籠、小匣、鐃鉢、火斗、鈴、驛鈴、鑿、鏡、鉦、佛器及ヒ諸飾金具等ノ類トス、又近來ハ海外ニ輸出スルモノ多シ、故ニ其製造家大ニ增加シ、百數十戸ニ及ヒ、產額モ亦タ年々增殖シテ、三十万圓以上ニ達セリ、

鑄鐵物

鑄鐵術開ケシハ蓋シ舊シ、天正年中名越與次郎ナルモノアリ、鑄造家ノ名人ト稱セラル、其製造セシ物品今尙存セリ、豐國神社ノ金燈籠ノ如キ是ナリ、且ツ茶ノ湯ノ盛ニ行ハレシヲ以テ、釜師ノ名匠輩出シ、名器ヲ製セシモノ少カラス、今釜座ト云フ町ハ、當時工人ノ住セシ町名ナレハ、其製造家ノ盛ナリシコト知ルヘシ、爾來鐵瓶ヲ造ルノ法モ大ニ發達シ、初代秦藏六及ヒ大西常壽及ヒ龍文堂鐵瓶ノ如キ名聲最モ高シ、其他ニモ製造家增加シ、一ノ產物トナルニ至レリ、

七寶燒

銅陶ノ二種アリ、此器ト支那製ヲ摹造セシモノニシテ、近世其術大ニ開ケ、益ト盛ナリ、初メハ主トシテ陶器七寶ノ粗笨ナルモノナリシカ、近來其製造銅器ニ變シ、製法最モ進歩シ、精巧ヲ極ムルニ至レリ、故ニ歐米人ノ嗜好ニ適シ、海外輸

出金額凡ソ二三万圓ニ達シ、製造家モ十數戸ニ及ヘリ、

刺繍

本ト女子ノ手藝ニシテ、其法古來ヨリ傳ハリ、昔時ハ衣冠或ハ曼荼羅等ヲ綉スルニ止マリシカ、世ノ開クルニ隨ヒ、需用增加シ、德川氏ノ時、上下ノ風俗華美ニ移リ、競フテ之ヲ用ヰルモノアルニ至リ、之カ爲メ所謂縫箔工增殖シ、其業最モ盛ンナリ、其製造法ヲ大別スルトキハ、平糸繡、絁絲繡、金絲繡、平金繡等ニシテ、其絲ノ使用方ノ名稱ニ至リテハ、頗フル多クシテ、細ニ之ヲ枚擧スルニ遑アラス、近年其法大ニ進歩シ、佛畫、花鳥、山水、人物、禽獸等ノ寫生畫ヲ隨意ニ繡出シ、殆ント其眞ニ迫マリ、且其大ナルハ丈餘ノ大幅ヲナスヲ以テ、歐米人モ其手藝ノ巧妙ナルヲ稱賛シ、需用益、多ク、製品大ニ增加セリ、其他半襟、重掛、着尺、打掛、屏風地、窓掛、寐臺掛、卓掛、帛紗等ノ類ニ屬スル製造戸數ハ四百七拾餘戸ニシテ、其繡賃ハ大凡一ヶ年二十七八万圓ニ達スルニ至レリ、

扇

宮廷及ヒ搢紳家等ノ儀式慶事ニ用ユル所ハ檜扇アリ、其他竹骨地紙、及ヒ絹張製ノ年扇、月扇、薄地雪洞扇、夏扇、鞠扇、中啓扇、大翳扇、細面扇、横目扇、軍扇、殿中扇、細骨扇、平骨扇、謠曲扇、舞扇、又近來外國ニ輸出スル各種ノ扇アリ、扇子ヲ外國ニ輸出スルハ初メ安政年中ニ、京都ノ商估某、之ヲ長崎ニ携テ試賣セシニ始マリシト云フ、慶應年間盧谷平兵衛吉川庄兵衛等率先シ、之カ貿易ヲ擴張セント欲シ、各種ノ扇ヲ製シ、長崎通商ニ委托販賣ヲナシ、爾後横濱神戸開港ニ及ヒ、乃チ歐米ノ商館ニ直接約定ノ便ヲ得、販路大ニ增進セシカ、後ヶ一時衰頽セシモ復タ盛況ヲ挽回セリ、京都ノ摺扇ヲ以テ名ヲ内國ニ博セシハ、御影堂扇ニ始マレリ、當初同堂ノ僧侶ノ所謂内職トシテ製セルモノハ、其親骨ノ末、能ク緊合シテ、久キヲ經ルモ、摺紙緩セス、永ク風涼ヲ取ルニ堪ヘタリ、故ニ江戸大阪ノ扇商モ、大抵御影堂ノ招牌ヲ掲ケタリシナリ、今内外向ノ製造家九十餘戸ニシテ製造額ハ十數万圓ニ達セリ、

團扇

製造ノ起原詳カナラス、相傳フ天正年間伏見深草ノ人河内屋利右衛門ナルモノ、奈良製ノ團扇ヲ摸造セシヲ始メトシ、所謂深草團扇是ナリト、是ヨリ後ヶ、大ニ傳播シ、種々ノ工夫ヲ凝ラシ製造スルニ至レリ、寛文年間ニ元政形（深草ニ元政上人アリ、其形ノ團扇ヲ製レリト云フ、）アリ、又安永年間ニ、京都西洞院ニ中村彦兵衛ナルモノアリ、挿柄團扇ヲ改良シ、八寸五段切繼、絹透入、金銀無地、絹貼無地、彩色、圖畫、紅日切繼、白紫切繼、柄ハ黑塗、又ハ蒔繪ヲ施セシモノヲ造リ、之ヲ都團扇ト稱ス、文政年間ニ

數寄屋形ノ團扇アリ、多クハ點茶家ニ愛玩セヲル、故ニ此稱アリ、又水團扇ナルモノアリ、防水ノ爲メ蠟或ハ漆等ヲ施シ、盛暑ニ水ニ浸シテ之ヲ使用スルナリ、明治年間ニ至テハ、海外輸出ノ路漸ク開ケ、四條通ニ擂谷平兵衛ナルモノナリ、水晶紙（寒天ヲ以テ製セシ紙）ヲ貼リタル切繼ニ、友仙模樣、京名所、玉川ノ圖等ヲ畫キシモノ、及ヒ其他數品ノ標本ヲ作リ、試ミニ商館ニ送リシカ、數年ヲ經テ販路開ケ、一時盛ンニ輸出セリ、又馬場龜太郎ナルモノアリ、從來ノ輸出品ヲ改良シ、糊地紙貼リニ、花鳥山水等ノ圖畫ヲ付シ輸出セシニ、頗フル外人ノ嗜好ニ適シ、爾來年々盛昌ニ趣キ、一ノ重要物産トナレリ、今ヤ各種ノ製造家ハ四十餘戸ニシテ、一ケ年ノ製産額六万七千餘圓ニ達スルニ至レリ、

金箔

薄片トシタル金ヲ、打箔紙ニ包ミ、鐵槌ヲ以テ打成シタルモノナリ、其箔ニ數品アリ、黃ニシテ赤色ヲ帶ヒタルヲ上トス、黃ニシテ青色ヲ帶フルヲ下トス、極上ナル者ヲ大燒貫ト云ヒ、次ヲ中燒貫ト云フ、夫ヨリ佛師箔、江戸箔、青箔、等アリ、其寸法ハ概ネ別打四寸、五分、四寸、三寸五分、トス、然レ𪜈好ミニ應シテ、大寸ノモノヲ造ルコトアリ、其大寸ヲ創メテ製セシハ、文化年中ノ箔工兒玉某ニシテ、方七寸ノモノヲ製シタルコトアリシ、其他銀箔、銅箔、唐箔、梨子地鈒、金泥、銀泥、黃銅泥、錫泥、金具等ノ類モ之ニ準シテ多ク産ス、今其製造家ハ、凡ソ二百四五十戸ニシテ、金銀箔ノ製造額ハ、拾五萬餘圓以上ニ達セリ、

翫弄品

人勝　頭ハ木屑ヲ糊ニ和シテ作リ、手足及ヒ胴ハ木ヲ以テ作リ、胡粉ヲ塗リ、後ヲ木綿裂ニテ頻リニ之ヲ拭ヘハ、光澤ヲ生ス、之ニ綾、羅、錦繡ノ衣ヲ着セタルナリ、或ハ眼眸ヲ水晶ニテ作ルアリ、種々ノ人物ヲ摸作ス、其製造ノ創メハ詳ナラスト雖𪜈、人勝ヲ弄フコトハ、源氏物語其他ノ古記ニ散見スレハ、古昔ヨリアリシナルヘシ、近時ハ風俗人形ト稱シ、武者人形、其他士農工商業ノ風ヲ摸セシモノ、多ク海外ニ輸出スルニ至リ、一ノ物産トナレリ、又裸人形アリ、木型ヲ作リ、紙ヲ厚ク糊貼シ、之ヲ乾カシテ後ヲ、型ヲ去ルヲ張抜ト云フ、手足面ハ木粉糊ニテ作リ、胡粉ヲ塗リ、光澤ヲ發ス、衣服ヲ着セスシテ、之ヲ販賣ス、故ニ此稱アリ、

土偶　京人形ト稱シ、東山深草ノ里ニテ多ク之ヲ製セリ、又芥子人形ナルモノアリ、土ヲ以テ作ル、人畜及ヒ諸種ノ物形アリ、長サ半寸許、亦タ小兒ノ玩弄品ナリ、多ク東山ニ産ス、

伏見人形　或曰稻荷神社ハ、世人尊崇シテ鍛冶ノ祖神トナス、故ニ其祠側ノ土ヲ用ヒテ刀劍ノ刃ヲ燒キツケシヨリシテ、古來其土ヲ堅メテ店頭ニ列ネ賣リ

シカ、イツシカ之ヲ人形ニ造リ賣ルコトヽナレリ、今モ猶鍛工此ノ土ヲ燒刃ニ用フ、故ニ遠國ニテハ、此人形ヲ碎キテ用フト云フ、古ハ傳法及ヒ土鈴、又ハ土牛等ノミナリシカ、後人形ヲ造ルコトヽナリテ、大小數品アリ、近時ハ玩弄品ヲ主トシテ、種々ノ物象ヲ造ルニ至レリ、

假面　弘安二年疫癘流行ノ時、葛野郡壬生寺ニテ紙製ノ假面ヲ作リ、寺傍ニ陳列シテ之ヲ賣ル、玩弄假面ノ始メトナスト云フ、當今各種ノ假面多ク產ス、

羽子板　大凡幅二三寸竪一尺餘ノ板ニテ、柄ヲ細クセシヲ羽子板ト云フ、無穗子ニ鳥ノ小羽三或ハ四五ヲ植エタルヲツク羽根ト云フ、羽子板ヲ以テ羽根ヲ揚ケ、板ヲ以テ承ケテ登降セシム、正月兒女ノ春嬉ニ供ス、下學集ニ曰ク羽子板ハ正月ニ之ヲ用ヰルトアリ、此書文安元年ノ著ナレハ、蓋シ四百餘年前既ニ有リシモノナリ、今ハ之ニ押繪、成ハ繪畫ヲ施シ、美麗ニ裝飾スルニ至レリ、

毛植細工及紙綿細工　絹糸及ヒ紙、綿ノ類ヲ以テ、各種ノ動物ヲ摸造セシモノニシテ、近來ハ專ラ海外ニ輸出スルニ至ル、人形及是等玩弄品、海外輸出ノ路開ケシハ、明治三年三月ノ比ニシテ、殊ニ京都ノ製品ハ、手藝ニ長シ、妙趣ノ存スルヲ稱賛シ、彼ノ嗜好ニ適シ、年々販路大ニ開ケ、今ヤ內外向ノ製造家八十餘戸ニシテ、產額數万圓ニ達セリ、

度量衡

度ニハ金尺鯨尺エル尺大佛尺等ノ種類アリ量ハ穀量、水量ノ別アリテ、古來其制同シカラス、故ニ諸國斗量ノ大小多寡均シキヲ得サリシカ、寛永十一年ニ幕府京都ノ商福井作左衞門、江戸ノ商樽藤左衞門ニ命シテ、斗量ヲ改造セシム、此頃迄ハ一般弦掛一升量ノミヲ用ヰ、寛文八年一升量ノ外、一斗量、七升量、五升量、五合量、一合量ヲ造ル、皆弦掛ナリ、元祿十七年弦掛二合五勺量ヲ造ル、享保十四年木地量ノ（弦ナキヲ云）一升、五合、二合五勺、一合量等ハ、京都醋商某弦掛量ノ鐵弦ヨリ鏹ノ出ルヲ憂ヒ、官許ヲ得テ造リシモノナリ、其後ハ液体ヲ量ルニハ、木地量ヲ用ヰ、穀物ハ弦掛量ヲ用ヰルヲ法トス、古昔ヨリ前田玄以京都所司代ノ時ニ、造ル所ノ斗量ニ至ル迄ヲ古量ト稱ヘリ、製造人ノ福井ハ業ヲ傳テ今ニ至レリ、衡權ハ桿秤、天秤等ノ別アリ、其大小同シカラス、慶長年間、幕府京都ノ神和三郎ニ命シ之ヲ造ラシム、其子孫累世業ヲ傳ヘタリ、

指物細工

京都ニ於テハ其製法夙ニ開ケ、木具有職ノ指物ハ最モ舊シ、其製スル所ハ、朝廷ノ儀式祭祀、及縉紳家ノ用ニ供セシモノニシテ、即チ櫟製ノ笏、及檜扇、柳筥、柳臺、三方、四方、折敷、曲物、八足臺、燭臺、又ハ色紙短冊掛ノ類、皆京都ノ製ニ限レルモノ

タリ、爾後唐木細工ナルモノ出テ、之ヲ唐木師ト稱ス、其用材ハ紫檀、黑檀、鐵刀木、又ハ黑柿ナリ、其妙技ヲ以テ世人ノ稱賛ヲ博セシモノ少ナシトセス、駒澤利齋ノ如キ是レナリ、其製ノ精巧優美ナルコト、他邦ノ及フ所ニアラス、殊ニ近來ハ此細工ヲ業トスルモノ大ニ增加シ、一ノ物產トナルニ至レリ、其種類ヲ擧クレハ、茶器、書棚、机、花瓶臺、文箱、簞笥、火鉢、提箱、戸棚、行燈、烟盆、日用雜品ナリ、

竹細工

全竹或ハ割竹等ヲ以テ、或ハ屈曲シ、或ハ聯組シ、又ハ彫刻シ、種々ノ精巧ヲ加ヘテ製セシモノナリ、就中有職翠簾ノ如キハ、古代ヨリ製法ヲ傳ヘ、神社、宮殿、縉紳家ノ用品ハ、之ヲ京都ニ仰クヲ以テ、其製造盛ンナリ、其他製品ノ種類ヲ擧クレハ、簾形短冊掛、彫刻山水花鳥扁額、手巾掛、茶量、茶筅、茶杓、花籠、花生、椅子、書架、杖、大同竹自在、棚架類等ナリ、

錫細工

其種類ハ、銚子、盃、盃洗、神酒瓶、酒壜、茶壺、茶筒、茶注、水注、茶托、茶瓶、小七、皿、鉢、等ナリ、

鐵葉細工

舶來ノ鐵葉ヲ以テ製シタル器ナリ、元來鐵葉ハ西洋ヨリ貨物ヲ容レテ輸入スル所ノ匣板ナリ、文政年間ニ於テ、三代龍文堂安之助其廢物ヲ利用セント欲シ、之ヲ以テ一二ノ器ヲ造リシニ創マル、爾來海外貿易業ノ盛ナリシニ隨ヒ、本品ノ輸入多クナリ、漸次其製造家ヲ增加シ、今ヤ各種ノ器ヲ造リ、殆ント之カ用ヲナサヽルモノナキニ至レリ、殊ニ京都ニ於テ製造スル茶入等ノ如キハ、製造精巧ナルヲ以テ、東京ヲ初トシ、各地ニ出スコト少ナカラス、其製品ノ重モナルモノハ、茶入、茶量、行厨、盃、小碟、水杓、花瓶、常露、等ノ類ニシテ、其他種類多シ、

鉛粉

婦女化粧ノ要具ニテ、古ヨリ製出セシモノヽ如シ、一時中絶セシヲ、泉州ノ藥舗小西清兵衞ナルモノ明國ニ入リ、其方法ヲ得テ、再ヒ流傳スト云フ、本品ハ鉛ヲ薄片トシ、醋ニテ蒸ストキハ、白粉ヲ生ス、益蒸セハ鉛益減シテ白粉トナル、是レ上品ノ白粉ナリ、京都ノ水質善良ナルヲ以テ、其製造ニ適シ、頗フル上品ナルニヨリ、四方皆其供給ヲ仰クヲ以テ、京白粉ノ名特ニ著ク、往時ハ盛況ヲ極メリ、今ヤ風俗一變シ、稍衰フト雖モ、古來其業ヲ世襲スルモノ往々存セリ、即チ延吉屋山下半兵衞ノ如キハ、最モ舊家ニシテ、其祖先ヲ延澤屋出羽ト稱シ、元龜天正ノ頃ヨリ創業シ、宮廷ノ調度ヲ專ハラトシ、爾來業ヲ傳ヘテ十一代ニ至リ、今猶盛ナリ、

臙脂

紅花ヲ用ヰテ之ヲ製ス、小盞ニ塗ルモノヲ紅猪口ト云ヒ、片板ニ塗リ携帶ニ便ニスルモノヲ紅板ト云フ、皆携帶ニ便ナラシムルカ爲ナリ、四方ノ婦女爭フテ之ヲ購フ、故ニ一ノ物産トナリ、其業ヲ營ムモノ多シ、其製造ノ創始詳ナラスト雖モ、下村和泉ノ如キハ、永祿年間ヨリ業ヲ傳ヘテ、今日ニ至レルヲ以テ考フレハ、古代ヨリ製造法ノ開ケシヲ見ルヘシ、而シテ小町紅ノ名殊ニ著シ、

墨

墨ハ京都及ヒ東京奈良ニ於テ、製スル所ノモノヲ、最モ上品トナス、京都ノ製造家ニテ最モ舊キハ長田重長ノ家ナリ、其先奈良ニ住シ、宮廷ノ調度ヲ辨シ來リシカ、天正年間ニ至テ、京都ニ來リ、爾來業ヲ襲セリ、又近世ニ至テハ、熊谷鳩居堂支那墨法ニ倣フテ佳品ヲ創製シ、今ヤ宮廷其他縉紳家ノ調度ヲ辨シ、盛ニ之ヲ製出セリ、

筆

其毫ハ羊、兎、鹿、貂、狸、鼠等ノ毛ヲ用フ、管ハ竹ヲ用フルモノ多シ、或ハ木及ヒ象牙、玳瑁、葦、茅等ヲ用フルモノアリ、大中小百殊ニシテ、毛質モ亦タ剛柔ノ異アリ、京都ニ於ケル製造ノ始ハ詳ナラスト雖モ、蓋シ古代ヨリアリシナルヘシ、宮廷ノ調度及書博士等ノ用ヲ辨シ來リシ家ハ、勝守及藤野等ナリ、相傳フ勝守ノ祖ハ、奈良ヨリ平安城ニ移リ、業ヲ營メリト、藤野ハ文明年間ヨリ京都ニ住シ、主トシテ宮廷及縉紳家ノ用ヲ調進シ來リ、二氏共ニ連綿業ヲ傳ヘ今ニ至ル、近年熊谷鳩居堂盛ニ其業ヲ營ミ、筆工ヲ支那ニ留學セシメ、其法ヲ研究スルニ至ル、其他製筆ノ業ヲ執ルモノ增加シ、之ヲ各地ニ販賣スルモノ頗ル多シ、

薰香

濫觴ハ未タ詳ナラス、其製方名稱等ノ舊記諸書ニ散見スルハ、嵯峨天皇ノ時代以後ナリトス、嵯峨ノ朝ニハ、即位朝拜ノ諸大禮ヲ始メ、年中ノ諸朝儀ニ、焚香ノ式アリシコト、弘仁式ニ載セリ、當時香事ヲ好尚シタルコト明ニシテ、遂ニ合香ノ製モ昉マリシナランカ、藤原冬嗣最モ薰香ヲ愛シ、其創意ヲ以テ、所謂黑方、梅花、侍從等ノ諸合香ヲ調製セシヨリ、朝貴相競フテ之ニ倣ヒ、仁明帝モ亦タ深ク之ヲ好ミ、更ニ黑方ノ一種ヲ製セラル、所謂承和ノ秘法是ナリ、桓武ノ皇子賀陽親王及ヒ參議滋野貞主等香事ニ名アリ、仁明ノ皇子八條宮ハ最モ香技ニ精シク、其調和ノ名方往々後ニ傳ハレリ、延喜中香事盛ンニ行レ、所謂六種ノ香モ、此時代ニ定マリ、益盛ニ行ハレタリ、中古亂離殆ト中絶シ、獨リ三條家ノミ、連綿トシテ其方ヲ傳フ、其家方ハ右大臣實親カ、後堀河帝ニ奉リシ以來、歷朝ニ奉リシ名香ナリシカ、太政大臣實美公明治十二年、家方ノ薰香及ヒ家記ヲ具シ、上表シ

テ之ヲ奏進シ、又悉ク其秘方ヲ京都ノ累代薫物ヲ業トスル熊谷直行（鳩居堂ト號ス）ニ親授シ、併セテ香記一卷ヲ與フ、是ニ於テ爾來直行ハ宮廷御用ノ香ヲ調進シ、今日ニ至レリ、今存スル香名ハ、黑方、玉椿、梅花、荷葉、菊花、侍從、落葉、若草、千種、新枕、薫衣香、扈衣香等ナリ、

色紙短册

色紙、大ハ竪八寸横七寸、中ハ竪七寸横六寸、小ハ竪六寸横五寸五分ヲ式トス、短册ハ、竪一尺二寸横二寸ヲ常例トシ、所謂四條好ミ、又二條幅是ナリ、其竪一尺一寸八分、横一寸八分ナルハ、冷泉幅ナリ、各種ノ模樣ハ、雲形又ハ金銀切箔、金銀砂子、金銀泥、丁子引、若クハ繪模樣ナリ、又花色紙アリ、寸法定マラス、金無地ニ着色ノ艸花アリテ、其艸花ノ半ヲ紙箋外ニ彫リ出タセリ、已上用紙ハ、鳥ノ子紙ヲ常トス、懷紙ハ竪一尺二寸横一尺六寸ニシテ、雲紙、鳥ノ子紙、大鷹檀紙、又ハ雲母模樣ノ色箋、所謂貫之紙ヲ用ユ、其他ハ各種ノ歌かるたトス、是等皆往昔ヨリ京都特有ノ物産ニシテ、盛ニ行ハレシカ明治維新前後ハ、稍衰狀ヲ現セシモ、爾後朝廷ノ歌道ヲ奬勵セラルヽヨリ、近年ニ至リテハ、之ヲ往時ニ比スレハ、其販路ノ內國ニ普及セルヲ見ル、

祇園香煎

糯米、陳皮、山椒、茴香等ヲ細末ニシテ製シ、湯ニ點シテ用フ、之ヲ香煎ト謂ヒ、又古賀志ト稱ス、赤穗義士原宗右衞門ノ孫、原儀左衞門道喜ノ創製ニ係ル、道喜晉テ其方ヲ當時ノ名醫山脇道三ニ受ケ、元祿十年店ヲ大和大路四條街ニ開キ、之ヲ鬻クヲ以テ業ト爲ス、後ヶ剔髮シテ了郭ト號ス、居ヲ祇園街ニ移シ爾來子孫其業ヲ傳テ今ニ至リ、旅客爭ヒ購フテ土産トナス、

砥石

刀刃ヲ研クノ具ナリ、越砥礪砥等ノ數品アリ、越砥ハ山城國鳴瀧山中ノ産ナリ、內曇ト稱スル淡墨色ナルヲ上品トス、又全國原山、嵐山、井手玉水等ヨリモ多ク産ス、礪石ハ山城國羽塚、全木屋村等ヨリ産シ盛ンニ他方ヘ輸出シ、一ノ物産トナレリ、

針

衣ヲ縫フ具ニシテ、大小數十種アリ、京都ニ於テハ福井某ヲ最モ舊家トナス、勝重ナルモノ延寶年間ニ宮廷ノ調進ヲ命セラレ、伊豫目ニ任セラレシ口宣猶ホ存ス、爾來業ヲ傳テ今日ニ及ヘリ、其他製造ニ從事スルモノ、幾ント二三十戸アリ、

弓箭

本邦上古ヨリ第一ノ武器、又武禮必用ノモノニシテ、其需用甚タ多ク、京都ニ於テ多ク之ヲ製造セリ、近年武藝一變射術ノ殆ト廢セシヨリ、大ニ其需用ヲ減セシモ、今猶京都ノ特産タリ、

弓ハ櫨木ト竹トヲ湊合シテ之ヲ造ル、白木又ハ黑赤漆髹アリ、葛藤卷、節卷、滋葛藤、笛葛藤、塗籠葛藤、二所葛藤、三所葛藤、七所葛藤、七五三等ノ製アリ、皆葛藤卷樣ニ隨テ名ヲ異ニス、上古ハ全木弓ヲ用フ、檀弓、槻弓、梔弓、梓弓等ナリ、皆其人身ノ高卑ニ隨ヒ、直立ノ額ニ至ルモノヲ用フト云フ、又半弓アリ、長僅ニ二尺ヨリ三尺許ニ至ル、又一面ハ平竹、一面ハ表半圓裏平ナル木ヲ合貼シタルヲ蒲鉾弓ト云フ、

箭ハ篦竹ヲ以テ幹ヲ製ス、鶴、鷲、鷹、山雞、雉子、鷺、鳶等ノ羽ヲ割キ三枚ヲ膠貼ス、其絃ヲ受ル處ヲ筈ト云フ、節筈續筈ノ二種アリ、鏃ヲ施ス所ヲ足ト云フ、幹ノ羽ト鏃トノ間ニ、袖摺、篦中、露承ノ三節アリ、又筈卷、沓卷アリ、糸麻ヲ以テ纏キ、黑朱漆ヲ以テ髹ル、金箔ヲ貼スルモアリ、幹ノ長短ハ、各其人ニ隨テ一定セス、

以上記ス所ハ、弓矢トモ其概略ニシテ、種類ノ多キコト枚擧ニ遑マアラス、製造人モ慶長以來業ヲ傳ヘテ今日ニ至ルモノアリ、

馬具

其種類頗多シ、唐鞍、倭鞍、移鞍、水干鞍等ハ朝儀ニ用ヲル、唐鞍ハ銀面雲珠等アリ、應安ノ頃大坪道禪、伊勢貞繼等、巧ニ鞍鐙ヲ造リ、其製專ヲ世ニ用ヰラル、近世ハ、最モ華美ヲ競ヒ、鞍鐙等ニハ金銀ヲ以テ、種々ノ摸樣ヲ鑲嵌シタルアリ、又漆髹ヲ施シ、或ハ梨子地、蒔繪、螺鈿等ヲ施シタルモノアリ、多ク京都ニテ之ヲ製作セリ、今其種類ヲ擧クレハ、鞍、鐙、障泥、鐙、銜、轡、鞅、鞦、逆靼、纏、鞦、鞍、褥、鞭等ナリ、

樂器

神樂ニ用ヰル和琴、篳篥、神樂笛、笏、拍子ハ本邦固有ノ樂器ニシテ、上古ヨリ傳ハリ、雅樂ニ用ヰル笙、篳篥、横笛、鞨鼓、太鼓、鉦、琵琶、箏等ハ隋、唐、三韓ヨリ傳リシモノト、之ヲ改造セシモノトナリ、古來多ク京都ニテ製出セリ、又俗樂ニ用ヰル、三絃、琴、鼓、太鼓、尺八等ノ類アリ、亦京都ノ物産タリ、雅樂ハ往時盛ンニ世ニ行ハレシヲ以テ、其製造販賣ノ盛ナリシヲ知ルヘシ、三絃ハ、永祿年間舶來品ヲ改良シテ製セリト云フ、其ノ後元祿ノ頃ヨリ、盛ンニ行ハレ、各地ニ於テ製造スレトモ、少シク其形ヲ殊ニシ、京都製ハ最モ世人ノ稱賛スル所トナレリ、故ニ其産額モ亦大ナリ、

冠服

推古天皇ノ時、始テ冠位ヲ定メ、群臣ノ等級ヲ別タレシヨリ、冠帽衣服ノ制定マ

レリ、其後織冠、繡冠、漆紗冠、立烏帽子、風折烏帽子、揉烏帽子、引立烏帽子、士烏帽子等ノ類アリ、又服ニハ、袍、下襲、袙、單衣、表袴、大口袴、狩衣、水干、直垂等ノ類ニシテ、其他石帶、平緒、魚袋、笏、檜扇、靴、履等、及ヒ女官裝束ノ唐衣、裳、表著、五衣、單衣、袴、小袿、打出衣等ノ類アリ、維新前ニハ、其織地製造裁縫製作等、京都ニ限レルヲ以テ、其供給需用甚多ク、特有ノ製産タリ、維新後服制改マリ、且ツ車駕東幸ノ爲メ大ニ衰頽セシカト、今尚ホ特別ノ製産物タリ、

法衣

初メ僧侶ノ官位ヲ定メラレシヨリ、其服飾ニハ、九條、七條、五條ノ袈裟、鈍衣、直綴衣、裳等ノ數種アリ、其製ハ等級ノ高下ヲ論セス、共ニ服スルモノニテ、唯其用ヰル所ノ綾、羅、絹布、又染色等ヲ以テ相當ヲ別テリ、然ルニ文治建久ノ間、禪、淨土、時宗、眞宗、法華等ノ宗派諸門ニ分レテ、更ニ和尚上人ノ稱號、或ハ長老、西堂、院家、連枝等ノ品秩ヲ立テ、各自ニ其相當ヲ定ムルニ至リ、其衣ニ等級ヲ立テ、品類ノ多キ、枚擧ニ遑アラス、其數種ヲ擧クレハ、道具衣、長裳、素絹、指貫、法服、法衣、直綴、大五條袈裟、九條袈裟、座具、道中衣、大絡子、絡子、位袈裟等ノ類ナリ、各宗諸本山概ネ京都ニ在ルヲ以テ、全國數十万ノ僧侶カ、其供給ヲ京都ニ仰キ、其産額モ亦タ甚タ多ク、其法衣ヲ製スルモノモ、諸宗ニツキ專業ニ分レ、一ノ有名ノ物産トナレリ、

丹後縮緬沿革

丹後國織物精好絹ノ稱ハ、昔時ノ書ニ散見スト雖トモ、縮緬ハ享保年間峯山ノ人絹屋治郎兵衛ナルモノ、其國ノ物産ヲ興サント欲シ、艱難辛苦ヲ積ンテ、終ニ創製セシヲ始メトス、仝年與謝郡加悅町ノ米屋小右衛門、三河内村ノ山本佐兵衛等、亦業ヲ始ム、又竹野郡網野村ノ室野茂七、本井源六、峯山ノ職工ヲ延ヒテ製造ヲ始ム、於是本業各地ニ傳播シ、爾來漸次隆盛ニ赴キシヲ以テ、宮津、峯山ノ両藩、及ヒ久美濱領等ニ於テモ、其保護奬勵ノ法ヲ設ケ、年行司ヲ置キ、之カ管理ヲナサシム、寶曆二年ニ機株ノ法ヲ設ケ、後ヲ復タ新株ヲ增シ、古株ヲ減シ、機數ノ制限ヲ立テタリ、與謝郡機株ノ起リハ、天明五年ナリ、是年仝郡加悅谷ニ於テ始テ輕薄ナル縮緬ヲ製ス、今ノ鹿子地ト稱スルモノ是ナリ、文政年間、幕府絹布ヲ禁セシタメ、本業モ衰微ヲ極メ、殆ント廢絶セントスルニ至レリ、然レトモ未タ幾年ナラス、漸次回復シ、爾來一盛一衰セシカ、明治維新以來ハ、年々隆盛、今ヤ與謝、中、竹野ノ三郡ニ於テハ、大、中、小幅縮緬ヲ初メトシ、紡績縮緬、綿縮緬、鶉縮緬、瓦斯縮緬、及ヒ海外輸出向ノ大幅薄縮緬等ノ類ヲ産シ、其製造家ノ數ハ、一千七百八十餘戸ニシテ、一ヶ年ノ製造金額ハ、二百七拾万餘圓以上ニ達セリ

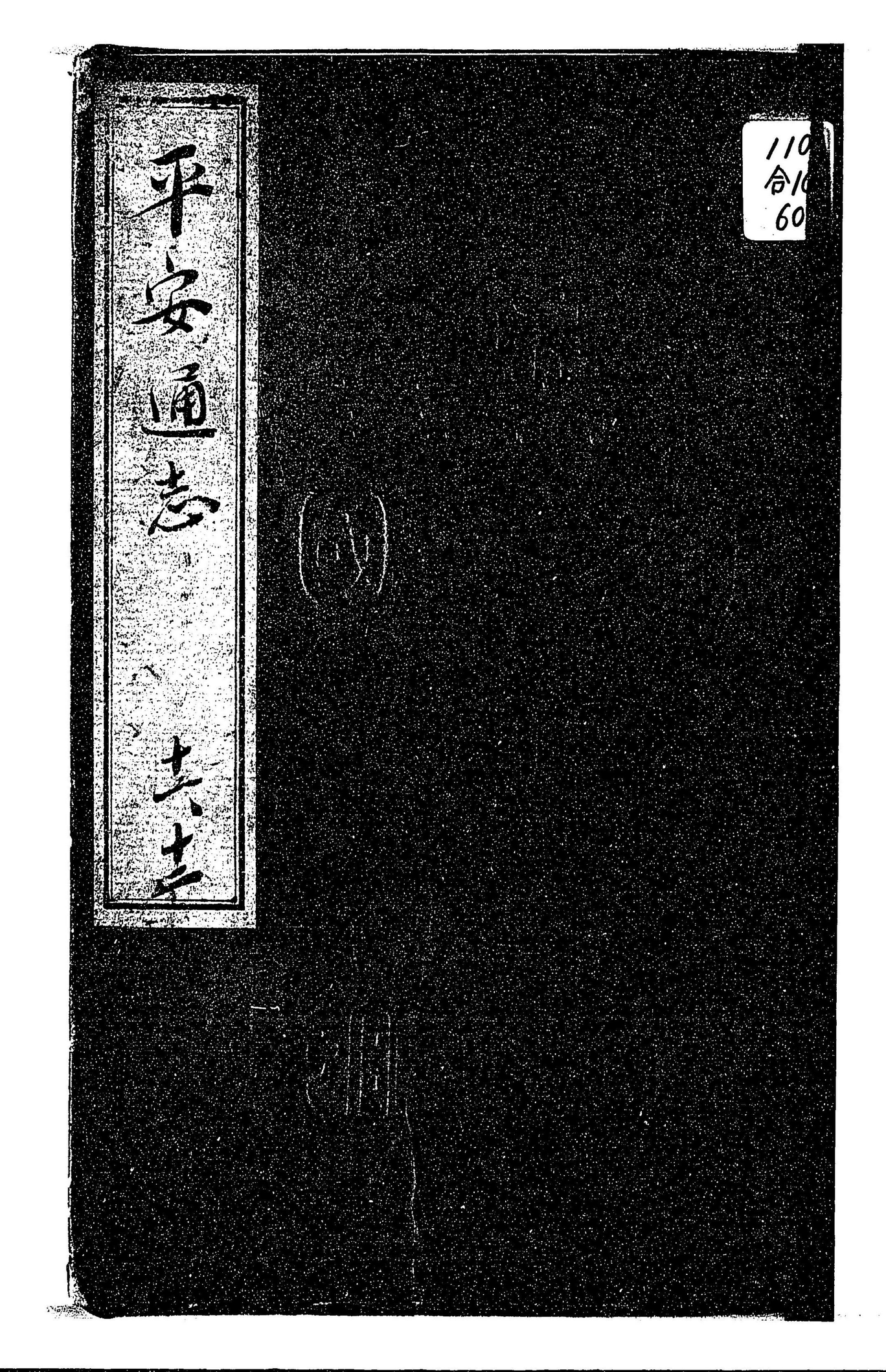
山城製茶

本邦ノ茶アル其始メ詳ナラス、聖武天皇ノ百僧ヲ禁庭ニ召シ、大般若經ヲ講セシメ、茶ヲ賜シユトアリ、蓋シ當時既ニ茶ヲ用ヰタリシヲ知ルヘシ、延暦年間茶ヲ畿内及ヒ近江播磨等ニ植エ、每歲進貢セシムルコト、史ニ見ユ、是ニ由テ考フルトキハ、我山城國ニ於テ茶ヲ植エタルハ、蓋シ此時ヨリ始リシナラン、其後中絶セシカ、榮西禪師明惠上人宋ヨリ茶種ヲ齎ラシ歸リ、之ヲ筑前國背振山ニ植エ、又栂尾ニ植エタリ、是レ山城國ニ於テ茶ノ復タ興リシ始ナリ、當時上人始テ煎茶ヲ製セリ、之ヲ製茶ノ開祖ナリトス、後ナ茶ニ適スル地ヲ撰ヒ、宇治ニ茶園ヲ開ヲク、永和年間、足利義滿大内義弘ニ命シ、梅尾及ヒ醍醐等ノ茶ヲ宇治ニ移シテ培養セシム、是ニ於テ宇治ノ茶大ニ發達シ、遂ニ天下ノ名産トナリ、後世其種子傳播シ、山城國各郡茶園有ヲサル所ナシ、是レ山城茶ノ名稱起リシ所以ナリ、然レトモ維新前ニ於テハ、茶園僅ニ千數百町ニ過キサリシカ、今ヤ海外貿易ノ上位ヲ占メ、我國物産中ノ優等品トナレリ、故ヲ以テ各人爭フテ之ヲ栽培シ其段別幾ント四千餘町歩ニ達シ、産額モ三百四十餘万斤ノ多キニ及ヘリ、其種類ハ碾茶、玉露、煎茶、紅茶等ナリ、

平安通志卷之三十九

卷	枚	表裏	誤	正	枚	表裏	誤	正	枚	表裏	誤	正
三十六	一				十				九			
	九	○	欽明	欽明		○	欽命	欽明		○	建テ時頼	建テ時宗
		○	三國佛敎畧史	三國佛敎畧史		○	瓦忍ノ尾州	瓦忍ハ尾州		○		
三十七	二	○	奬學院ヲ建ツ	六宇德	一	○			三	○	曾祖康頼	曾テ康頼
	十二	○	土門御	土御門	三	○	雅忠	康頼	十五	○	永享	永享
	十六	○	義植	義稙	十二	○	水鏡	水鏡	十九	○	種痘	療痘
					十七	○	秀久	久秀				
三十八	十	○	三陵	十三陵	十	○	遠墓	遠陵	十一	○	七合	七厘
	十一	○	遠墓	遠陵	十二	○	ナル	アル	十九	○	愛墓	愛宕
三十九	一	○	佳鹿	佳麗	一	○	種別ハ	種別スレハ	二	○	一ノ二	一、二
	五	○	模樣	模樣	六	○	藏六及ヒ	藏六	六	○	器ト	器素ト
	七	○	四寸、五分、	四寸五分、	十四	○	縮緬沿革	縮緬	十四	○	コト	コト
	十四	○	梅尾	梅尾								

110
10
60



110
合10
60

025638-006-4

110-60

平安通志

京都市参事会

和6冊

M28

ADC-3146